

食卓の木の下で

～あの日、あの時、みんな笑った～

高泉 淳子

プロローグ

大きな木の下にテーブルがある。

中年を過ぎた落ち着いた雰囲気の男女が、向かい合って食事をしている。

女 ごめんなさいね、突然呼び出したりして。

男 うん、いや、いいんだよ。僕も君に話があったから。

女 あら、なに？

男 うん、あとで話すよ。君こそ、なに？

女 あのね、

男 うん。

女 ずっと考えてたんだけど、やっと決心がついてね・・・。

男 うん。

女 その一、恥ずかしいわ。ちょっと食べながら聞いて。

男 そう。

女 あのね・・・、それ、骨気をつけて。

男 え？

女 そこの骨。

男 え？ああ……。これなんて言ったっけ？
女 ラムチョップ。
男 あ、そうそう、ラムチョップ。ここに来ると必ずでてくる。
女 どう？
男 うん……。うん、おいしい。
女 そう。
男 で、なに？
女 え？
男 いや、だから、君の話。
女 うーん……。
男 ね、
女 あのね、
男 うん。
女 ……、ちょっと食べながら聞いてて。
男 うん。

男、食事を続ける。

女、立ち上がると古いプレイヤーの蓋をあけ、レコードに針を落とす。

『I f I H a d Y o u』が流れる。

マイクスタンドの前で、記憶の中から、言葉を、ひとつ、ひとつ、とりだ

すようにして語りはじめる。

女　彼をはじめて見た時、
　　なんだか、
　　今までに感じたことのない、
　　情に包まれました……。
　　それは、とてもなつかしい気持ちと、
　　それと同時に、
　　誰にも触れられたくない、
　　心の隅っこに、
　　触れられてしまったというような、
　　ちょっと胸が痛くなるような、
　　そんな気持ち……。

　　その日から、
　　私のまわりを、
　　遠く過ぎ去ったあの日のことが、
　　ついてまわりました。
　　その記憶は、
　　私の中にはっきりと……、

ガチャンと音ががする、
男、フォークを落としている。

男 あ、ごめん。

女

女、話を続ける。

女 その記憶は、
私の中にはっきりとあったのです。
私の家族の幸せを奪ったのは、
弟なのではという、
子供の頃彼に抱いていた思い
弟さえいなくなったら、
弟さえいなくならなかったら、
父も、母も、ずっとあの頃のままで、
姉も私も、今よりもずっと幸せだったのではという、
そんな思い

姉、ボウルをかきまぜながらのぞいている。

女 あれからずいぶん、
時間が経ってるというのに、
弟のことをまだそんな風に思っている、
自分の本当のところにある冷たさに、
はっとするのです・・・。

姉 ねえ・・・。

女 えっ。えっ？

姉 どう？（ボウルをさしだす）

女 （指を入れて味見して）いいんじゃない。

姉 そう。

女、話を続ける。

女 そんな自分を思うと、
自分がいやで愛せない。

姉 ね、

女 ましてや、
人のことなど、
愛するなんてできないっ、
姉 ねってば、
女 と、思ってしまうのです。
姉 なにやってるの？
女 ちょっと黙ってて。

女、話を続ける。

女 そう思って、今までずっと
ひとりで生きてきました。
姉 ね、
女 彼は、
あの日の記憶をもって、私の前に
あらわれたのです。
姉 ね！
女 あともうちょっとで終わるから、黙ってて！
姉 もう。(立ち去る)

女、話を続ける。

女　彼は、驚く程あの頃の父に、
そっくりでした。
彼を見ているだけで、
姉も私も子供の頃に帰ったような、
もしかしたらこの先に、
楽しいことが待っているような、
そんな気持ちにさせてくれました・・・。

女、話が終わると、マイクスタンドを片付ける。

姉、妹の上着をもって出てくる。

妹、上着を着替えて、手鏡で髪の毛をなおす。

女、鼻歌を歌いながら料理の支度をしている姉のそばに近づいていく。

1 出会ったその日

妹　ねえ、これちょっと派手じゃないかしら？

姉　似合ってるわよ。

妹　そう？　なんかおかしくない？

姉　おかしくなんかないわよ。

妹　ねえ、どうして。どうしてこんな勝手な真似なんかするのよ。

姉　誕生日でしょ。にぎやかな方がいいと思って。

妹　おかしいって思ったのよね。誕生日パーティーだなんて、何年もやっていのに、急にどうしたんだろうって。

姉　フー・・・。

妹　フーじゃないわよ。だったらだっただ、ちゃんと相談して欲しかったわよ。

妹　レコードをとめる。

姉　言ったら、いやだっていうに決まってるでしょ。

妹　そりゃそうよ。

姉　　ちょっとグラス取って。
妹　　え？（グラスをテーブルに）
姉　　いっつも会わないで断ってばかりなんだもの。
妹　　頼んでもないのに写真なんか送ってきたりするからよ。
姉　　だって、じゃないとあなたずっとこのまんまだもの。
妹　　このまんまって？
姉　　このまんま。
妹　　どのまんま？
姉　　だから、このまんまってことよ。
妹　　ねえ、私のいったい、どこがこのままだっていうのよ。

姉、料理を皿に盛って。

姉　　できた。さっ。
妹　　私、会わないから。
姉　　何言ってるの。
妹　　いやよ。絶対。
姉　　子供みたいなこと言っちゃって。
妹　　会わない。（立ち去ろうとする）
姉　　ちょっと。

妹 （どンドン奥へ入ろうと歩く）

姉 どこ行くのよ。ちょっと！

姉、妹カズキの手を引っばる。

妹 痛っ！ 痛い！ お姉ちゃん力あるから引っばると痛いよ！

姉 早く！

妹 わかった、会うから離して。

姉 その手にはのらないわ。

妹 ほんとに会うから。

姉、一瞬手を放そうとする。

そのすきに逃げようとするカズキ。

姉 あー、ちょっと、待ちなさい！

妹 ……。

姉 本当、嘘つきなんだから。

妹 だって、会ったってしょうがないじゃない。

姉 早く！

妹 いやよ。

姉 いらっしやい

ふたり、大騒ぎしながら、庭に出したテーブルのところまでやってくる。
庭の木をながめていた男、何事だろうという目をして振り返る。

妹 あ……。 (男の顔を見て驚いて立ち止まる)

姉 ね。

妹 そっくり。

姉 でしょ。

妹 パパに、そっくり……。

姉 そのまんまって、感じでしょ。

妹 うん。

男、立ち上がると、背筋を真っすぐにして会釈をする。
あんまりていねいなものだから、ふたりともあわてて、ていねいにおじぎ
をする。

男 あの・・、お茶、頂いちゃってました。

姉 ハーブティー。うちの庭に生えてるの、ね。

妹 うん。(うなづく)

男 そうなんだ……。なんか、こう、生きてるって感じがしました。

妹 生きてるって、誰が？

男 誰が？

姉 やだもうこの子ったら、なに言ってんの。ハーブが生きてるってこと。おいしいってことでしょ。その辺のお店で飲むのとは違って、ね。

男 ええ、まあ、そうです……。

妹 ……。

姉 (男に) どうぞ、座って。フフフ……。
(妹に) ほら、いいから早く座って。ね。

姉に促されて、ふたり、ぎこちなく椅子に腰かける。

妹 ……。

男 ……。

姉 フフフ……。いやだもう、なにふたりともかたくなってるの。まるでお見合いみたいじゃない。

妹 お姉ちゃん……。

姉 あ、料理もできたことだし、ね、お酒にしません？西条さんも、

その方がいいでしょ？

男 ええ、まあ。

妹 西条さん？

姉 あ、ごめんなさい。まだ紹介してなかったわね。あの一、こちら西条さん。

男 西条です。はじめまして。

妹 はじめまして。

姉 こちらが妹のカズキ。

男 あ・・・。

妹 よく姉に間違えられるんです。私の方が老けて見えるから。

男 いや、そんな・・・。

妹 なんか苦労が多くて、ぱーっと老けちゃった。

姉 また、そんなこと。私たちふたつしか変わらないの。私ってね、昔っから若く見られちゃうのよね。フ、フフフ。いやだもう立ってないで座って。どうぞ。

妹 ・・・・・。

男 ・・・・・。

姉 西条さんのこと、お料理教室でお見かけしてね。

妹 料理教室・・・。先生？

男 あ一、いえ・・・。

姉 生徒さん。
妹 生徒？
姉 そうなの。たったひとりの男性。もうみんなの人気者なの。
男 いや、そんな・・・。
姉 娘さんがいらしてね、
男 え、あの・・・、
妹 娘さん？
姉 ふたりいらしてね、
男 え、あの・・・、
妹 ふたり？
姉 奥さまとお別れになったんですって。
妹 ああ、そうなの・・・。えー・・・。
男 いや、あの、そうなんです・・・。
姉 そんなこと気にしなくたって。ねえ。たったひとりの人と一生添いとげるなんて、今じゃ神話みたいなもんなんだから。
妹 お姉ちゃん・・・。
男 あいや、いいですよ。変に気遣ってもらうより、そうやってはっきり言ってもらった方が、かえて気が楽でいいです。
姉 でしょ。この子ったらそういうところが気が回らないの。かえて人に気遣わせちゃうの。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。

姉 そう、そう、お酒だったわね。えーと、ワインでいいでしょ。

男 え、あ、はい・ ・ ・。

妹 私、とってくる。

姉 いいの、あなたは座ってて、あんただと選ぶの長いから。

妹 いやだ、私がとってきたい。

姉 いいのよ。いいから、はい、座って。こういう時はね、適当で
いいの、適当で。酔えばみんなおんなじ。ね、

男 ・ ・ ・ ・ ・。

姉 すぐ戻ってくるから、お相手してて。ね、

妹 お姉ちゃん。お姉ちゃん・ ・ ・。

姉、ワインを取りに行く。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。

男 ・ ・ ・ ・ ・。

妹 ワイン小屋、あるんです・ ・ ・。

男 ワイン小屋？

妹 ほんとは鳥小屋・ ・ ・。

男 鳥小屋？

妹 私、子供の時、鳥たくさん飼ってて、かわいそうになっ
て全部外に放しちゃって・・・。

男 ハハハハ・・・。

妹 もどってくるかなと思って、待ってたんですけど、全然戻っ
てこなくて・・・。

男 ああ・・・。

妹 私がいつまでたってもめそめそしてるからって、父がある日鳥
小屋に柵つくって、ワイン並べて・・・。

男 はあ・・・。

妹 父ったらワイン飲むたびに、お前が鳥たちをはなしてやったか
ら、そのごほうびに鳥が夜こっそりワインをこっそり運んでく
るんだなんて・・・。

男 優しいお父さんですねえ。

妹 え？あ、いやだ。私、そんなことすっかり忘れてたのに・・・。
いやだ・・・。

男 僕、そんなにお父さんに似てます？

妹 そっくり・・・。え、あ、いえ・・・。まあ・・・。

男 お姉さんが突然声かけてきて、妹さんの誕生日にびっくりさせ
たいって。

妹 そうなんですか。いやだ、お姉ちゃんたら・・・。

男 すみません。ずうずうしくお邪魔しちゃったりして。
妹 こっちこそ。うちの姉が無理なこと言っちゃって。
男 いえ。
妹 やだ。無理矢理・・・？
男 いや、そんなことはないんです。

姉、ワインを持って入ってくる。

姉 びっくりしちゃった。カズキ知ってた？パパったら、空のワインの瓶とコルク、ぜんぶとってあるのね。
妹 そうよ。
姉 西条さん、見て、コルクに飲んだ日付けまでつけてるの。ほら。ほら、これ全部よ、ほら。
男 これ全部ですか。すごいですね。
姉 すごいっていうより、私、なんか鳥肌たっちゃった。
妹 なんの意味もないのにね。
姉 え？
妹 そんなのって、時間が経っちゃったら、意味なんかなくなっちゃうのに・・・。
姉 そう言ってしまえばそれまでだけど・・・。

妹 私ね、あのワイン小屋、壊そうって思ってたの。
姉 え？
妹 もう古いし、木が腐りかけてるし、ワイン取りにいつつぶれたりしたら危ないもの。
姉 そんなもったいないわよ。パパ大事にしてたのに。直せばいいじゃない。そういうところに頼んで。
妹 誰が頼むの？
姉 え？
妹 お姉ちゃん頼んでくれない？私、仕事で昼間この家にいないんだから。
姉 私はだめよ、昼間はなんだかんだって家の仕事あるし、あつという間に子供達帰ってくるし、
妹 いつつもそんなこと言って、私にばかり・・・。
姉 ・・・・。
男 あの・・・、もしよかったら、僕、休みの日にでもなおしましょうか？
妹 え？
男 あ、いや、あんまりうまくないけど。
姉 え、そんな、いいんですか、そんなことお願いしちゃって。
妹 お姉ちゃん・・・。

姉　だって、せっかくだもの、ねえ。
男　じゃ、そのワイン小屋、見せてもうらおうかな。
姉　どうぞ。どうぞ。こっちです。庭の奥にあるんです。なんだか、
　　すいません。無理にお願いしちゃって・・・。

姉、男を案内すると、すぐに戻ってくる。

姉　なんか、感じのいい人でしょ。
妹　・・・・・・・・。
姉　娘さんがいるのはちょっとあれだけど、でもあの年まで結婚し
　　てなくてひとりっていうのも、なんか気持ち悪いでしょ。
妹　・・・・・・・・。
姉　あ……。いやだ、あんたのこと気持ち悪いって言ってるんじ
　　ゃないのよ。
妹　誰もそんなことなんか思っていないわよ。
姉　そうよね。フフフ……。

姉、男の様子を見に、ワイン小屋に入っていく。ひとりテーブルに残され
たカズキ、姉の持ってきた古いコルクを手にとって見ている。

妹　なにひとりで浮かれちゃってんだろ。もう……。こんなにいっぱい。ほんと。全部に日付書いてある……。(ひとつのフォルダを見つけて) 何これ、なんか書いてる……。「カズキ、♀歳の誕生日、みんなで木の下で」……。

突然、ガシャンという大きな音がする。

妹　いやだ、なんの音……？

カズキ、ワイン小屋の方に目をやる。

妹　もう、だから言ったのに……。

カズキ、庭の奥にあわてて駆けていく。
あたりを見回しても姉が見当たらない。

妹　お姉ちゃん！お姉ちゃん！

奥から、あの頃の父親、出てくる。

父 いやー、いやーびっくりした。ハハハ・・・。
妹 パ、パパ！
母 あなた！ 大丈夫？

女性の声がして振り向くと、なんとそれは母親だった。

父 あ、大丈夫、大丈夫。
妹 ママ・・・。
父 いやー、棚が急に落っこちてきちゃってね。前から、あの棚危ないって思ってたんだよなあ。
母 もう・・・。
父 でもね、ワインだけは割れないように、ちゃんとほら。
母 あなたったら。
叔母 お兄さん、大丈夫？
叔父 大丈夫ですか？
母 あ、大丈夫、大丈夫。棚のねじがゆるんじやってたみたいでね。いきなりドーンってさ。
叔母 危ない。打ちどころが悪かったら、
父 いっちゃってるよね。ハハハ・・・。
母 ハハハじゃないわよ。

カズキ、いやだ、あなたったら、まだそんな格好して。今日はあなたのお誕生日なのよ。叔父さんと叔母さんにも来てもらってるんだから。ママ、ハンガーに新しいワンピースかけておいたでしょ。お姉ちゃんに手伝ってもらって、早く着替えて。ミズキ！ ミズキ！

子供の姉のミズキ、走ってやってくる。

姉　なにっ！
妹　お姉ちゃん・・・。
母　もうカズキったら、まだこんな格好してるの。手伝ってあげて。髪もきれいにとかして。
姉　ばあか、またママに怒られてんの。

姉、カズキの手をひっぱって部屋に連れていく。

2 9歳の誕生日

陽だまりを追いかけていくと、大きな木があり、それを傘にしてテーブルが置いてある。そこにはあの頃の叔母と叔父がいて、叔母はできあがった料理をテーブルに並べ、叔父は慣れない手つきでグリルで肉を焼いている。両手にワインの瓶を持った父と母が肩を並べて歩いている。父が何やら喋りかけると、母はエプロンを顔にあて笑っている。父と母が大きな木の下に吸い込まれていく。

カズキ、姉にワンピースを着せてもらいながら、窓からその時間の風景をじっと見ている。

母 あなた、あの棚危ないから直しておいてね。

父 はいはい。

母 カズキなんか今だにあそこで寝たりしてるんだから。

叔母 カズキったら、そんなことしてるの？

母 この人がね、鳥がこっそり夜中にワイン運んでくるんだなんて言うもんだから。

叔母 へー、鳥がワインを運んで来るんだ。

叔父 (バーベキューの焼き加減をみて) これぐらいでいいのかな？
父 どれ、ちょっと待って。あ、それさ、まだ中まで火が通ってないなあ……。あのね、均等に火が通るように、こうやってころがして回しながら焼かないと。こうやって……。

叔父 手さばきがちがうなあ。
父 慣れてるもん。

叔母 スペアリブに、手羽先に、えーと、これなんて言ったっけ？
父 ラムチョップ。
叔母 そう、そう、ラムチョップ。
叔父 ラムチョップ？
母 ラムにパン粉つけて揚げたの。
叔母 お母さんの得意料理だったの。今じゃ姉さんの得意料理。
叔父 へー。
叔母 わー、このローストビーフ、おいしそう。でも、なんか、肉づくしって感じじゃない？
母 でしょ。
叔母 カズキって、そんなに肉好きだっけ。
母 その反対。
叔母 え？
母 お肉、食べないの。

叔母 前、食べてたわよね。
母 鳥飼ってから、鳥もいっさいだめだし、それに、玉子もね、だめなの。
叔母 玉子も？子供はみんな好きって思ってた。
母 かわいそうって泣くのよ。
叔母 結構重症ね。
父 でもね、砂肝は食べられるんだ。
叔母 砂肝？
母 そうなの。大好きなの。
叔母 なんでよ？砂肝だって鶏でしょ。
母 その辺があの子のおかしなところなのよね。
父 ヤギのチーズなんかムシャムシャ食べるんだから。
叔母 えー、あれって結構クセあるわよね。
父 でもね、お肉じゃないから。お乳だから。
叔母 お乳？
母 乳製品は好きなの。お乳はママの愛情だからって。
叔母 ハハハ……。おかしな子ね。
叔父 優しいんだよ。
父 だめ、だめ。優しいだけじゃ、人間苦勞するからね。だから今日はこのメニュー。

叔母 だけど食べられないものばかりじゃない。誕生日なのにかわ
いそう。

母 私もそう言ったんだけど、この人ったら聞かないの。

父 愛情だよ、愛情。食べていくってことは、生きてくってことな
んだからさ。そうだよ、ハハハハ……。

叔父 え？ああ、そうなのかな、ハハハハ……。

父 そうさ。

叔父 でも、大丈夫かなあ。

父 大丈夫だって。砂肝が食べられるんだ。どれかひとつでも食べ
られたら、みんなでほめてあげてよ、ね。ね。ね。

叔父 あ、はい。

母 結局は甘いのよね。

叔母 そうなのよね、ハハハハ……。あ、来た、来た。

姉 早く！

ワンピースに着替えて子供になったカズキ、姉のミズキに手を引かれて、
木の下に入ってくる。

叔母 あら、かわいいワンピース。

姉 ママが縫ったの。ママからのプレゼント。

叔母 そうなの？
姉 そうよね。
妹 うん。
叔母 すっごく似合ってる。
姉 カズキったら、レースがついてるからいやだっていうのよ。
叔母 あら、レース嫌いなの？
母 女の子っぽいのがよこの子。だからちょっとだけつけたのに。
叔母 どうしよう・・・。
母 なにが？
叔母 プレゼント。
母 え？
叔母 レースがいやなら、フリルはもっといやよね。
母 フリル？
叔母 フリルのついたスモック。かわいいかなって思って。ねえ。
姉 ハハハハ・・・。
妹 ・・・・。
母 プレゼントなんだもの、ね、うれしいわよね。
父 そりゃ、うれしいよな、カズキ。
妹 ・・・・。

叔母 はい、カズキ。これ。叔母さんからのプレゼント。あけてみて。
母 あーら！
父 何だ？ 何だ？
姉 早く！ 早く！
妹 あ、（じっと見てる）
姉 見せて！（とりだす）うわっ、すごいフリル！ハハハハ……。
叔母 かわいいでしょ。
姉 こんなのカズキ、似合わないわよ。
母 ミズキ！（カズキにスモックをあててみて）かわいい、似合っ
てる。
姉 どこが？
父 （咳払い）
叔母 かわいい！ ちょっと着てみてよ。ね。（着せて）あららら、
かわいい。やっぱり女の子はこうでなくっちゃね。
妹 ……。
叔母 ……。
父 カズキ、お礼は？
妹 ……。
父 カズキ。
妹 ……。

叔父 いいんだよ、無理しなくって。
父 よかないんだよ。カズキ、お礼言いなさい。カズキ！
妹 ありがとう・・・。
父 なんだ、その言い方は！
母 あなた！
叔母 いいんだってば！
父 よかないんだよ！パパ言ったな。そういうところが、お前のいちばんよくないところだって。お前は動物には優しいけど、人には優しくないところがあるぞ。人の好意ってものを無にするところがある。
妹 ム・・・？
父 ちょっとむずかしかったかな？簡単に言うと、人の心の中にバタバタと裸足で入って行って、
叔父 土足じゃないですか？
父 え？
叔父 土足。
父 あ、そう、土足、土足。土足で入って行って、
妹 土足って？
父 だから、靴をはいたままってこと。いいか、人の心の中に靴をはいたまま土足で入って行って、台所におじゃましてだ、

姉 台所？

母 あなた、なに言ってんの。

父 え？

妹 ね、心の中に台所があるの？

父 たとえだよ、たとえ。

姉 たとえって？

父 たとえばあったとしてだ、台所におじゃまして、夕飯ごちそうになって、おなかいっぱい食べておきながら、「あー、こんなの食べなきゃよかった」なんて言うところ、お前にはある。そうだろう？

妹 なんだか、よくわかんない。

父 なんだかよくわかんないじゃない。そういうところがお前にはあるんだ。いいか、ひとさまのおうちにまで行って、夕飯ごちそうになったんだぞ、たとえおいしくなくても、おいしかったですって言うのがエチケットだろ。

姉 エチケットって、歯をみがくこと？

父 え？ それもエチケットだけど、そういうことじゃなくて…、なんて言ったらいいんだ、その一、そう、思いやり。人を思いやる心。いちばん大切なこと。

妹 歯をみがくこと？

父 じゃない。歯をみがくことが大切なんじゃなくて、歯がにおわ
ないかなって気にしながらみがくこと。それが思いやり。わか
るか？

妹 うん、なんかわかる。

父 よし。だから、たとえうれしくなくても、「こんなフリル着ら
れたもんじゃないわ」って、たとえ思ったとしても、叔母さん
はお前のためを思って、選んで買ってくれたんだ、「ありがと
う」っていうのがほんとだろう。

妹 うん。

父 よーし。じゃね、ちゃんとお礼を言いなさい。たとえうれしく
なくても、叔母さんに「ありがとうございました」って、ほら、
ちゃんと気を遣って言ってごらん。

妹 わかった。ありがとうございました。

叔母 どういたしまして。

叔父 おい。

母 ごめんね、気を悪くしないで。

叔母 気なんか悪くしてないわよ。ただ気遣ってお礼言われても、あ
んまりいい気しないわ。

父 ……。

姉 叔母さん、怒ってる。

妹　　ハハハ・・・。
叔父　乾杯しよう。ね、お姉さん、乾杯しましょ。
母　　あ、そうね。カズキの好きなサングリア作ったのよ。
妹　　わー、ね、いちごいっぱい入れて。
姉　　あー、私も、私も。
妹　　お姉ちゃんよりも、いっぱい。
姉　　あんた、ちびなんだからちょっとでいいのよ。
母　　喧嘩しない。

母、ガラスの広口瓶に入っているサングリアをグラスに分けると、姉、みんなにグラスを配る。

叔父　子供たち、アルコール大丈夫かな？
母　　大丈夫。アルコールとぼしてあるし、シロップも多めに入れてあるから・・・。さあ、みんな、グラス持って。あなた、乾杯。
父　　あー、そうだな。では、カズキが元気に♀才になったことをお祝いしまして、乾杯！
全員　乾杯！
父　　おめでとう！
全員　おめでとう！（拍手）

妹 ありがとうございます。

母 さあ、食べましょ。いっぱい食べて。

父 いただきまーす。あ、じゃ、このお肉いただきちゃおうかな。

叔母 おいしそう。ね、そのローストビーフとって。

母 はい。

父 あ、これいい焼き加減。

叔父 そうですか。よかったあ。

母 これ食べてみて。

叔父 あ、おいしいです。

母 でしょ。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。

姉 カズキの食べれないものばかり。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。

父 カズキ、鶏は無理でも、どれかひとつでもいいから、食べてごらん。牛とか豚は大きくて恐いかもしれないけど、それは大丈夫じゃないか。

妹 なにこれ？

父 ラムだ。

姉 ラムって？

父 子羊。

妹 ヒツジ？
父 羊の赤ちゃんだな。メー、メー。かわいいなあ。
妹 ……。
父 うん、うまいうまい。こりやすごくうまい。ね、
叔父 ああ、おいしい、おいしいです。
叔母 ほんと、おいしいわ。
母 おいしい！

カズキ、ヒツジをじっと見つめている。

父 このヒツジ、砂肝なんかよりずっとずっとおいしい、ね。
叔父 え？あ、うん、ほんとだ、おいしい、な、
叔母 え？あ、ほんと、おいしい。
叔父 うん…。
妹 ヒ・ツ・ジ…。
母 カズキ、大丈夫？
叔母 やだ、顔色が青くなってる。
叔父 いいよ、食べなくて。無理して食べなくたっていいよ。
妹 ……。
父 カズキ、ちょっとでいいから食べてごらん。このヒツジだって

な、死んで腐って骨なんかになるよりも、こうやってみんなに
おいしく食べてもらえるほうが、ずっと、ずっとうれしいんだ。
ね、

叔父 え？あ、そうなの、かな・・・。

妹 ……。

父 ちょっとでもいいから、食べてごらん。

妹 ……。

父 おいしいぞ。食べてみてよかったって、絶対に思うぞ。

妹 ……。

父 パパ、今までいちどだってカズキに嘘なんかついたことなかつ
たな。

妹 3回あった・・・。

全員 ハハハハ・・・。

父 (咳払い) パパがおいしいって言ってるんだ。絶対おいしいぞ。

カズキ、ヒツジを見つめたまま動かない。

父 カズキ！

母 あなた！

叔父 食べたいって思った時に、食べればいいさ。

叔母 そうよ。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。

父 ・ ・ ・ ・ ・。

叔母 ほら、これ、カズキの大好きなヤギのチーズと、

叔父・叔母 砂肝だあ。

母 あらら、砂肝。

父 （小声で）だっ、せっかく・ ・ ・。あー、あー、・ ・ ・

みんな、父親の様子をうかがいながら、気まずい雰囲気食べている。

カズキ、そっとヒツジに手を伸ばす。

姉 あ・ ・ ・。

母 カズキ・ ・ ・。

叔父 カズキちゃん・ ・ ・。

父、じっと見つめる。

カズキ、ヒツジを皿に持ってくると、意を決したように手をつかむ。

父 よおし、頑張れ！

母 いやだったら、無理して食べなくていいのよ。

叔父 いいんだぞ、食べなくなかったら食べなくていいんだ。
父 なに言ってんだ。本人がその気になってるんだ、無責任なこと
言うな。
叔母 なにその言い方。お兄さん、そういう言い方はないんじゃない
の。この人はカズキのことを思って・・・。
叔父 いいから。
叔母 よくないわよ。
母 なにもそんな向きにならなくなったって。
叔母 だって・・・。
父 あのね、親っていうのはね、子供の身になって痛みを分かち合
うもんなんだよ。一緒になって苦しみを乗り越えていこうとす
るもんなんだ。あんた達は第三者だから気楽なこと言えるんだ。
叔母 気楽だなんて。この人はほんとにカズキのこと思って。
父 親じゃないあんた達になにが一体わかるっていうんだ。
母 あなた！
叔母 ひどい！私たちに子供がないからって、ばかにしてるのね。
母 そんなこと言ってないわよ。
叔母 ひどい、ひどいわよ！
叔父 ・ ・ ・ ・ ・。

カズキ、ヒツジを口に入れる。

姉 あ！食べた。
全員 え？
叔母 やだ。
父 カズキ、頑張れ。よくかんで飲み込むんだ。
母 カズキ、大丈夫？

カズキ、吐きそうになる。

父 カズキ！
叔父 気持ち悪かったら無理するな。吐いちゃえ！
父 なに言ってるんだ。カズキもう少しだ。出すんじゃないぞ。飲み込め！
母 カズキ！
姉 飲みこんじゃいな。

カズキ、ゴクリと音を立てて飲み込む。
全員じっと見守る。

母　　大丈夫？
叔父　カズキちゃん。
叔母　カズキ・・・。
父　　どうだ。うん？　なんてことないな。

カズキ、じっとしたまま動かない。

父　　カズキ！
母　　カズキ・・・。

カズキ、人形のように硬くなったまま動かない。
叔父、カズキの胸に耳をあてる。

叔父　息してないぞ！
叔母　え？
母　　あなた！
父　　水だ、水持って来い！

母、水をとりに走る。

父 息を吸って。息止めるんじゃない。カズキ！
叔父 息を吸って！
母 あなた、水！
父 （水を飲む）
母 あなたが飲んでどうするのよ。
父 え？ああ。さあ、飲んで。全部飲むんだ。

カズキ、水を飲む。

父 大丈夫か？
母 カズキ。
叔母 大丈夫？
叔父 何ともないか。
妹 （うなづく）
全員 （溜息をついて）は一。
父 いやー。
母 よかった。
叔父 ほんと、よかった。
叔母 もう、どうなるかと思ったわ。

カズキ、大きく息を吸い込むと、にっこり微笑む。

妹 おいしかった。
叔母 え？
妹 これ、ほんと砂肝なんかよかよりもおいしい。
全員 えー！

カズキ、ラムチョップを手で掴むと、ムシャムシャ食べる。
全員、一瞬顔を見合わせて、拍手する。

父 やったぞ。
母 この子ったら。
叔父 偉い！
叔母 食べれたじゃない！
全員 ハハハハ・・・。

全員、大きな声で笑いだす。
カズキ、なにかとっとうれしくなって、幸せな気持ちになる。

妹 おいしいねー。

3 不幸のはじまり

姉、カズキにテーブルごしに話しかける。

姉　ねえ、

妹　ん？

姉　今、ものすごく幸せな気分でしょ。

妹　うん。

姉　このまま、この時が、ずっと続けばいいって思ってるでしょ。

妹　思ってる。

姉　今のこの幸せを胸いっぱい感じておくのよ。

妹　なんで？

姉　いいから感じて。感じてる？

妹　感じてる。

姉　幸せ？

妹　幸せ。

姉　はい、消えた。

妹　消えたって、なにが？

姉 幸せよ。
妹 なんで、なんで消えたりなんかするのよ。
姉 すぐそこに不幸が待ってるから。
妹 不幸？ どんな？
姉 知らなかった？
妹 え？
姉 パパね、あなたのこと男だったらよかったのについて思ってるのよ。
妹 うそよー？
姉 ほんとー。あなたが生まれた時のパパのがっかりした顔、見せてあげたかった。
妹 そんなに・・・。
姉 うん。
妹 でもパパ、あたしのことすごい好きだもん。
姉 今はね。
妹 え？
姉 弟ができたからおしまいね。
妹 ね、弟ができるの？ そうなの？
姉 まだわかんないけど、パパが欲しいってママに言ってた。
妹 えー、えー、えー。

姉　ね、
妹　・・・・・・・・。
姉　ねってば。
妹　もう、信じられない！

カズキ、突然走りだす。

母　カズキ！　ご飯の最中に・・・・・・・・。
叔父　もう、食べないの？

カズキ、プレイヤーに針を落とすと、早いテンポの『I Know
That You Know』が流れる。
マイクスタンドの前に立つと、唐突に日記を取りだして読みはじめる。

妹　3月³日金曜日、くもり
ショック！　パパはあたしが男の子だったらよかったって思って
たんだ。だったら男の子になってやろう。そしたらパパは弟が
欲しいだなんて思わなくなる。

父　もう、どうしても欲しくてさ。

母・叔父・叔母 ハハハ・・・。

妹 3月9日水曜日、晴れ
おっぱいが大きくなるように、胸に包帯をグルグル巻きに
していたら、お姉ちゃんが手伝ってくれた。

妹 3月29日日曜日、晴れ
今日は立っておしこの練習をした。

姉 もっとお腹をつきだして。

妹 こう？

姉 足をひらいて。

妹 こう？

姉 そうそうそう。

妹 うわあ、ビショビショ！

姉 あーあ。

妹 やっぱりだめだった。

4月1日水曜日、晴れのち雨

もう誰も信じられない。願いはかなわなかった。弟が生まれる。
ぜつぼう。

叔母 え一、ほんと！
父 ハハハハ・・・。
叔父 そうかあ。
叔母 今、何ヵ月？
母 3ヵ月に入ったところ。
叔母 今度は男の子だったらいいわねえ。
父 男、絶対に男！
叔母 え、もうわかるの？
母 ううん。
叔母 また女の子だったら、
父 え？
叔母 がっかり？
父 そりゃ、がっかり。ハハハハ・・・。
叔父 ハハハハ・・・。
叔母 じゃ、その時は、その子私に頂だい。
母 え・・・？
父 ・・・？

叔父　おい！
叔母　冗談、冗談よ！ハハハハ・・・。
叔父　ハ、ハ、ハハハ・・・。
父　ハハハハ・・・、
母　ハハハハ・・・。
姉　あ、雨だ！

父、母、叔父、叔母、テーブルの皿やワインのボトルを持って、奥に入る。

妹　4月2日木曜日、晴れ
昨日は人生もう終わってくれって感じだったけど、今日はバラ色って感じ。いい方法を考えた。弟がママのおなかから出てこないように、どんなにこっちの世界が大変か、毎晩話してあげることにした。

姉　ね、ね、ね、
妹　あん？
姉　夕べは、なに話して聞かせたの？
妹　なんにも悪いことしてないのにいじめられたインディアンの話と、それから牧師の父親にファックされた少年の話。

姉 甘いわね。
妹 え？
姉 あっちだって必死なんだから、もっと作戦ねらなきゃ。
妹 うん。

妹 4月9日火曜日、くもり
今日は作戦を変えて、乞食王子の話をしてやった。

父、母、叔父、叔母、出てくる。母のお腹が大きくなっている。

妹 5月9日日曜日、晴れ
今日はおばさんたちが来て、みんなで庭で食事をした。おばさんは子供が欲しくてもできないらしい。おじさんが酔っぱらって庭で吐いた。

叔父 (吐いている)
父 君、大丈夫？
叔父 すいません。高いワインなのに・・・。
父 そんなこと気にしないでよ。
叔父 (吐く)

妹 5月3日土曜日、くもり
ママのお腹が動いた。やつはなんとしてでも生まれてこようと
している。

母 あ、また動いた！
父 どれどれ？ おー、このやんちゃ坊主！

妹 6月7日金曜日、くもり
ママのお腹はどんどんでっかくなってくる。あいつは生まれて
くる。

7月9日日曜日、晴れ
今日パパが弟の名前を発表した。

父 大きな樹と書いて大樹だ。
母 ダイキ！
叔母 (拍手)
叔父 (拍手)

妹 あとは弟じゃなくて、妹であることを神さまにお願いしよう。

9月2日水曜日、くもり

ママが夕べおなかが痛くなって、パパが病院に連れていった。
食べ過ぎだった。

父 いったい何食べたんだ？

母 オムレツに、にんにくのトーストに、焼き豚に、チキンピラフ
に、ワンタンスープに・・・、

父 それじゃお腹がパンクしちゃうぞ。

母 いいの。どっちみちパンクしちゃうんだから。

父 りゃそうか、ハハハハ・・・。

母 ハハハ・・・。

妹 9月2日土曜日、くもり

ママが急にお腹が痛くなった。また食べ過ぎかって笑ってたら、
今度は陣痛だった。

母 痛い！ あなた！

父 あ？

母 あなた！

叔父　きた！　きた！　きた！

母、奥へ入っていく。父、叔父、叔母、姉、続いて出ていく。

姉、ゆっくり出てくる

姉　生まれたわよ。

妹　どっち？

姉　ついてた。

妹　いやあああ！

姉　これからはこいつが主役ね。

妹　パパ、もうあたしのこといらなくなる？

姉　いらなくはないけど、どうでもよくなるわね。

妹　弟のことばかりかわいがる？

姉　たぶんね。

妹　（目に涙を浮かべる）

姉　人気ってね、新しいものに奪われるの。

妹　・・・・・・・・。

姉　あんたが生まれた時、あたしそうだったもん。次はあんたの番よ。

妹 いやよ、そんなの。

姉 そういうもんなの。あきらめなさい。

4 弟が生まれたお祝い

母、ダイキを抱いて、父、母、叔母、叔父が楽しげに笑いながら集まってくる。

叔母 かわいい！

父 もうさあ、目と鼻なんか、僕にそっくりだよね、ね、

叔父 え？あ、ほんとだ、そっくり。

叔母 男の子でほんとよかったわね。

母 この人ったらね、おいおい泣いちゃって。

叔母 やだ、泣いたの？

父 え、その、ね、「やった！」っていう達成感っていうのかな、あついものが、こう湧きあがってきちゃってさ。ハハハハ……。

叔父 ハ、ハ、ハハハ……。

父 あ、そうだ、今度さ、生み分ける方法教えてあげるからさ、そんな時は聞いてよ。ハハハハ……。

叔母 その前に子供をつくる方法、教えてもらいたいわ。

父 え……。

母　　・・・・・・・・。

叔父、突然、吐き気をもよおす。

叔父　　うっ！

母　　あら、大丈夫？

叔父　　す、すみません。ちょっと、飲みすぎちゃったかな。

母　　お水持ってきましょうか？

叔父　　あ、はい、いえ……、うっ！

父　　あー、わかった、わかった。じゃ、向こう行こう。

叔父、庭の奥の方に走っていく。

父　　もうちょっと我慢して……。我慢して、我慢して！

叔父　　ウエー！

母　　大丈夫かしら？

叔母　　大丈夫よ。

叔母、テーブルに座って、ワインを注いで飲む。

母 できない、できないって思うからいけないのよ。
叔母 そんなんじゃないわ。
母 え？
叔母 あの人、まだ姉さんのこと好きなのかなあって・・・。
母 や、やだ、あなた、そんなこと・・・。
叔母 だって、姉さんにふられて、だからあの人、私と・・・。
母 そんなばかなこと・・・。あなた、なにばかなこと言ってんの。

叔父、父、出てくる。

母 大丈夫？
叔父 すいません。なんか飲みすぎちゃって・・・。
父 あやまることなんかないって。
叔母 やだ、姉さんせっかく作ってくれたのに、吐いちゃったの？
叔父 すいません。
母 そんなこと、いいのよ。
父 そう、いいんだ、いいんだ。お祝いなんだから。こうやって、外で陽ざしを浴びながら、昼間っからワイン飲んでんだ。どんどん進むし、吐きもするって。ハハハハ・・・。じゃ、飲みな

おそうか。いいワインがあるんだ。

叔父 いや、でも・・・。

父 大丈夫。一度吐いちゃったら、もうこっちのもんさ。免疫できちゃったから、いくら飲んだって大丈夫。これが、今日メインの有機栽培のワイン。

叔母 へー、有機栽培。

姉 ゆうきさいばいって？

妹 なに？

父 え？だから、その・・・、化学肥料とか体に悪いもの、いっさい使っていないんだな。自然のこやしを使ってる。

姉 自然のこやしって？

父 うんことかおしっことかだ。

妹 うえー！

姉 そうなの！

父 体にいいワインなんだぞ。さあ、これだったら大丈夫。さあ、飲んで、飲んで。悪酔いしないから。

叔父 あ、いただきます。

妹 うわー、おしっこのワイン！

姉 飲むんだ！

父 飲んでみるか。

妹 うん、
姉 やだー、
母 あなた、
父 大丈夫、ちょっとだけならいい薬だ。ほら。

父、娘たちのグラスにワインを注ぐ。

母 そんなに飲んだ？
叔父 なんか急に酔いがまわっちゃって。
母 疲れてるんじゃない？
叔父 いや、そんな・・・、
叔母 この人ったらね、なんだか毎日疲れてんの。ねえ。
妹 おじさん、疲れてんの？
叔父 ……。
父 このヤギのチーズ食べてみて。この赤ワインとちょうどあうから、さあ。
叔父 うっ……。
叔母 ちょっとすごい匂いね。
父 そう？ はじめのうちだけだよ。そのうち止まらなくなる。
叔母 うわ、やだ。ごめんなさい。

父 有機栽培っていうのはね、ぶどうの木に化学肥料を使ってない
というわけじゃないんだな。土そのものに化学肥料を使ってない
わけ。その土が本来持っている特性を生かしてぶどうの木を
育てる・・・。

叔母 やっぱ自然がいいのよね、人工じゃなくて。

母 野菜でもなんでもおいしいわよ。

叔母 私、迷ってるの。

母 なにを？

叔母 人工授精か、体外授精か。

叔父 (ワインをふきだす) プーツ。

父 あ、ちょっと、君・・・。

叔父 す、すみません。

子供達 ハハハハ・・・。

母 そこまで深刻なの。

叔母 深刻よ。どうしたってできないんだもの。

姉 できないって、なにが？

母 なんでもないの。

妹 飛び込みよ。

姉 え？

妹 プールに飛び込めないんだわ。鼻に水が入って、耳がキーンっ

てするから。

姉 ばか、あんたなに言ってんの？

母 いいから、それ全部食べなさいよ。ね、人工授精と体外授精ってどう違うの？

叔母 ぜんぜん違うわよ。人工授精っていうのは、

妹 空に誰かが打ち上げたのよ。ビューン！

母 ちょっと黙ってなさい。

父 あ、ちょっと待って。ぼくが当てるから。あのね・・・、人工授精っていうのは、試験管とか、あの、ほらガラスのまるっこくて、ふたのついてるやつ。

叔父 シャーレ。

父 そう、そう、それ。そのなかに採りだした卵子と精子を受精させて、それをまた身体のなかに戻す・・・、

叔父 あ、それが体外授精。

父 え？ あ、そうか、そうだよ、体の外で受精させるんだもん
な。

母 そうね、そうなんじゃない。

父 となると、人工授精っていうのはどうなんだ・・・。

妹 だから、空に誰かが打ち上げたんだってば。

姉 あ、それ、あたしのもらった！

妹 あたしのよ！
母 けんかしないの！
父 ちょっと待って、ちょっと待ってね……。あ、そうか、人工的に授精させるんだから、子宮の中で、人工的に授精させるんだ。夫の精子をピンセットかなんかで採りだして……。ね、そうでしょ。きっとそうだ、ね。
母 そうなの？
叔母 そうよ……。
叔父 ……………。
父 ほら、当たった。やっぱりだ。
母 そうなの……。
父 そいでね、聞いた話なんだけど、人工授精の場合、夫の精子じゃない場合もあるんだよね。
母 え、そうなの？
父 夫に精子がない場合はそうなんだよ、ね。
母 誰の？誰の精子使うの？
父 そりゃさ、夫婦にとって信頼関係のある人でしょ。親戚とか、親友とか、夫の兄弟とか……。あ、それから僕みたいな人。
母 え？
父 妻の姉の旦那とか。

母 いやだわ、そんなの。
叔母 ……。
父 でも、どこのどいつかわかんない奴のなんかより、いいでしょ。
姉 どこのどいつかわかんない奴って誰？
母 誰でもないの。
妹 行方不明の人。
姉 そんなんじゃないわよ。
妹 山で遭難した人よ。
叔母 ね、この子酔っぱらってるんじゃないの？
妹 あつい…。
母 え？やだ、カズキ、全部飲んだの？
姉 酔っぱらってる！
母 ほら、水飲んで！
叔父 どこのどいつかわかんない奴じゃないと駄目なんです。
父 え？
母 え？
叔父 非配偶者間受精の場合、そういうルールになってるんです。
父 どこのどいつかわかんない奴のを使うの？
叔父 医学部の現役学生の精子を使うって決まってるんです。
母 へー、お医者さんの 卵子の 卵子。

父 たまごじゃないよ、精子だよ。
叔母 ・ ・ ・ ・ ・。
父 やっぱりあれ、わかっちゃいけないもんなんだ。
叔父 ええ。
母 変な人じゃないからまだいいけど、やっぱりいやね、そんなの。
叔父 4000万はあるんです。
父 4000万？
母 なにが？
叔父 精子の数。
父 誰の？
叔父 僕の。
父 そうなの？
母 すごいじゃない。
父 すごいさ、ね。
姉 すごい。
妹 すごいね。
父 いや、すごいよ。4000万！ いや参った。
叔父 若い奴らなんか8000万あるらしいです。
母 あらそうなの。
父 8000万？ なんだよ、それ。

叔父　でも、４０００万でも・・・。
父　いやすごいよ。りっぱなもんだよ。
母　すごいわよ。
叔母　すごくなんかないのよ・・・。
父　え？
叔母　ぜんぜんすごくなんかないの。
母　そんなことないわ、４０００万よ、すごいじゃない。
妹　すごいよねえ。
姉　すごい、すごい。
叔母　（立ち上がって）すごくなんかないの！そんなんじゃ妊娠できないの！
叔父　・・・・・・・・。
叔母　普通の人には５０００万から６０００万はなくちゃいけないのよ。
父　そんなになきゃいけないの？
叔母　４０００万の中の８％しか運動してないの。だとすると２４００万よ。妊娠するには３０００万は必要なの。２４００万じゃだめなのよ！
母　ねえ、ちょっと、落ち着いて！
叔母　なんにもわかってなくせに！姉さんに私の気持ちなんかわかるもんですか！どうせ、私は姉さんの後釜なんだから。

父 後釜？
母 なに言ってんの！
姉 あとがまって？
妹 こまごめ。
母 黙ってなさい！
子供達 ……。
叔母 この人、姉さんのことまだ忘れられないのよ。だから、だから、
精子がちゃんと運動してないの。私の前じゃ止まって動かない
のよ！
母 なんてこと、なにばかなこと言ってるの！
叔母 （泣く）
叔父 みんな僕が悪いんだ。僕がこんなばかりに！
父 悪くなんかないよ。（手をかけようとする）
叔父 （手をふりほどいて）あなたに僕のなにがわかるっていうです
か！
子供達 ハハハハ……。
叔父 あんたなんか、あんたなんか、わかるもんか！（ワインを
一気に呑み干す）
父 あ、それ、高いワインなのに……。
母 ……。

叔母 ・ ・ ・ ・ ・。

叔父 いっつも勝ちほこった顔して。いっつも俺のこと笑ってるんだ。

父 君ね・ ・ ・。

叔父 女房にもこけにされて、みんなの笑い者にされて。どうせ俺は、
種なしぶどう、ぶどうだよ。ワインにも馬鹿にされる種なしぶ
どうだ！くやしかったら、くやしかったら俺のぶどうでワイン
でも造ってみろよ！

父 なに言ってんの？

母 ・ ・ ・ ・ ・。

子供達 ・ ・ ・ ・ ・。

叔母 ウッ、ウッ、ウーン！みじめ、みじめだわ。なんで私ばかり
りこんなみじめな思いしなきゃいけないのよ。ウーン。

叔母、大声で泣きながら、庭の奥に駆けていく。

叔父 なんで、なんで、こんなことでみじめにならなきゃいけないん
だ。ウッ！

叔父、涙をこらえて、庭の奥に駆けていく。

母 あなた・・・。

父 うん。いったい、何がどうなってんだ。

父と母、叔父と叔母を追って駆けていく。

子供達だけとり残される。

姉 みんな変。

妹 あいつのせい。

姉 え？

妹 ダイキのせい。

姉 そうね、パパずっと浮かれっぱなしだものね・・・。

妹 ね、おじさんってさ、ママのこと好きなの？

姉 かもね。

妹 ママは？ママ、おじさんのこと好き？

姉 な訳ないじゃない。

妹 そうね、な訳ないわよねー。ね、精子ってさ、どんなの？

姉 うーん、虫みたいなんじゃない。

妹 ゲンゴロウ？

姉 もっと小さいわね、ミジンコぐらい。

妹 ミジンコ。

姉 そう。
妹 4000万のミジンコか・・・。
姉 想像できる？
妹 できない。
姉 そうね。
妹 な、なんで、4000万のミジンコが止まって動かないの？
姉 ……。
妹 ね、ね、ミジンコがおばさんのこと怖いから？
姉 種がないから。
妹 そうか、おじさん、種なしぶどうだから？
姉 そう。
妹 おじさん、かわいそう……。じゃ、あたし、おじさんちの子
供になってあげようかな。
姉 え？
妹 だって、パパ、これからあたしじゃなくて弟のことばかりか
わいがるんでしょ。
姉 そうよ。
妹 ママだってあたしよりお姉ちゃんの方が好きなんでしょ？
姉 そうよ。
妹 だったらあたし、おじさんちの子供になる。

姉 そうね。そしたらおじさんとおばさん、あんたのことものすごくかわいがるわね、きっと。

妹 うん。そうかあ……。おじさんが私のパパかあ……。

5 もしもおじさんの子供になったら

叔父 カズキ、カズキ！

どこからか、叔父の呼ぶ声が聞こえてくる。

叔父 カズキ、カズキ！

農夫の姿の叔父が来る。

叔父 ほら、今日はこんなに穫れたぞ。

妹 うわあー、これみんな種なしぶどう？

叔父 そうだよ。種がなくて食べやすくておいしいんだ。ほら。（1粒つまんでカズキの口の中に入れる）

妹 ほんとだ。甘くておいしい。

叔父 そりゃそうさ。世界でいちばんおいしいワインになるんだから。

妹 ワイン？

叔父 いくら飲んでも悪酔いしないおいしいワイン。

妹　　へー。
妹　　ね、パパ。
叔父　なんだい？
妹　　お願いがあるの。
叔父　言うてごらん。
妹　　ここのぶどう園、あたしが大きくなったら動物園にかえてもいい？
叔父　えー？
妹　　だめ？
叔父　いいとも。お前の好きにするがいいよ。
妹　　ほんとに！
叔父　パパはね、お前が好きなことなら、なんだってかなえてあげたいって思ってるんだ。
妹　　じゃあね、カンガルー飼ってもいい？
叔父　いいよ。
妹　　ほんとに。
叔父　明日買いにいこう。
妹　　パパ、ありがとう。

叔母が向こうの方からやってくる。

叔母 カズキ、カズキ！
妹 ママ！
叔母 あら、もう、帽子もかぶらないで。日射病になんかなったら、
ママ気絶して死んじゃうわ。
妹 ママ見て、パパが穫った種なしぶどう。
叔母 まあ、こんなに穫れたの？
叔父 カズキのおかげだ。カズキのおしっことうんこがいい肥料にな
ってる。
叔母 ほんと、この子は私たちに幸せを運んでくれたわね。
叔父 ああ。
叔母 さあ、ごはんができたから帰ろう。
妹 ママ、今夜はなに？
叔母 カズキの好きな、砂肝とヤギのチーズとサングリア。
妹 ママ、ありがとう。
叔父 さあ、帰ろう。

三人、手をつないで歩いていく。

叔母 あ、そうそう、姉さんとか大変みたい。

叔父 どうした？

叔母 ダイキがね、女の子の言葉を喋って、スカートはいて一日中踊ってるとだって。

叔父 そうか、お兄さんとも大変だな。うちとは大違いだ、ハハハハ・・・。

叔母 そうね、ハハハハ・・・。

三人、幸せそうに、笑いながら家路を帰っていく。

暗転

6 出会ったその日 part 2

笑い声が男と姉の笑い声が変わっていく。

テーブルに座って、姉がワインを飲みながらひとりで喋っている。

男 ハハハハ・・・。

姉 ハハハハ・・・。

男 そうなんだ。

姉 そうなの。もうみんなで捜してね、父なんか誘拐されたんじゃないかって大騒ぎ。

男 そうか、家出か。

姉 もう何回も。いつかなんかね、父と母に「長い間お世話になりました」って挨拶して、出て行ったのよ。

男 ハハハハ・・・。

姉 叔父さんも叔母さんも、今度はいつ来るんだろうって、楽しみにして待ってたりなんかして。

男 そうか・・・。

姉 あの子って、ちっちゃい頃から変なことばかりするの。中学

になっても胸にタオル、グルグル巻きにしてたんだから。

男 ハハハハ・・・。

姉 変でしょ。私とぜんぜん違うの。

男 そうなんですか？

姉 もうぜんぜん。ほら、私ってやっぱり長女でしょ。親の期待裏切れないってところがあるのね。損だわよね、なんかもっと好きなことやってればって、今になって後悔してるの。結婚だって、親に気に入られる人選んじゃったでしょ。両親が亡くなったら、なんかいろいろ考えちゃって。このままでいいのかなあって・・・。

男 ・・・・。

姉 いやだ、私ったら。自分ばかり喋っちゃってる。ごめんなさい。

男 いえ・・・。

姉 昔はね、私なんかよりあの子の方がぜんぜんお喋りだったのよ。

男 そうなんですか。

姉 今日なんかね、喋ってる方。あの子ブスツとしてるように見えるけど、西条さんのこと気に入ってるのよ。

男 は？

姉 いつものブスツとぜんぜん違うんだから。私にはわかるの。

男 いや、そんな・・・・・・・・。

姉 （自分のグラスをみて）あら、からっぽ。いやだもう。

男 あ、すみません。気がつかなくて。（姉のグラスにワインを注ぐ）

姉 すみません。どうも。

カズキ、チーズを盛った皿を手にして入ってくる。

妹 はい。

姉 あら、チーズ？

妹 もう食べるもの、みんななくなっちゃって。

男 すみません。僕、おいしいもんだから、なんかバクバク食べちゃって。あの骨のついたお肉、なんて言ましたっけ？

妹 ラムチョップ。

男 あ、そうそう、ラムチョップ。とってもおいしかったです。

姉 もっといっぱい作ればよかった、ねえ。

妹 いつもひとり分しか作らないから、なんか量がわからなくて。

男 いや、僕、沢山いただきましたから・・・・・・・・。

妹 お姉ちゃん、飲みすぎ。

姉 いいじゃない。なんか楽しくて。ここんちでこうやって庭にテ

ーブル出して食事するなんて何十年ぶりかしら？

妹 そうね・・・。

姉 子供の時以来。

男 そうなんですか？

姉 日曜日にね、叔母さん達が来るたびに、みんなで庭にテーブル出して。

男 へえ・・・。

姉 どうぞ。(男のグラスにワインを注ぐ) もっと飲んで。

男 あ、ありがとうございます。

姉 はい。

男 ひとりで暮らしてるなんて思いませんでした。

妹 え？

男 この家に入った時、なんか、そんな・・・。

姉 この子がそんな風にしてるから。

男 え？

姉 玄関にも、父と母の靴が並べてあったでしょ。

男 え？ああ・・・。はい。

姉 傘も傘立てにみんなの分ちゃんとあるし、小学校の時の名札がついてある傘もあるんだから。

男 へえ・・・。

妹 片づけるの面倒だから、だからそのまんまにしているだけよ。
姉 嘘。この子ったらね、早くに家出て、家族がいなくなったら、
戻ってきて、この家から出られなくなってしまってるの。
妹 そんなことないわよ。
姉 そんなことあるわよ。ほんとは私なんかよりもパパとママのこと
と思ってたくせに、好きだったくせに、わざと家に近づかなく
なって。
妹 ……。
姉 弟のこと、自分のせいなんかにして。
妹 お姉ちゃん！
男 ……。
姉 ……ふふふ…、ちょっと酔っぱらったかな。お茶入れてく
る。
男 はい。
姉 ね。

姉、席を立つ。

カズキ、グラスのワインを飲み干すと、自分でワインを注ぐ。

男 あ、すいません。なんか、気がつかなくて。

妹 いいんです、慣れてるから。
男 いや、僕が・・・。
妹 いえ、ほんとに。
男 でも、
妹 やだ。
男 はい・・・。
女 ・・・・。
男 あの・・・、
妹 ・・・・。
男 あの・・・、
妹 はい・・・。
男 いや、その・・・、あ、このチーズ、おいしいですね。
妹 ヤギのチーズ。
男 ヤギ？
妹 ちょっと匂いがきつくて、クセがあるでしょ。
男 い、いえ、おいしいです。
妹 そう？
男 いや、ちょっとクセがあるけど、おいしいです。
妹 ・・・・。
男 下の子が、チーズ大好きなんです。

妹 え？
男 あんまり食べないから、ストローみたいに細いんですけどね、
チーズだけは食べるんです。
妹 あら、そうなんですか？
男 ええ。ホットプレートに、ふかして薄切りにしたジャガイモを
並べて、チーズを溶かしておかかとおしょうゆをかけたやつ、
あれ、大好物なんです。
妹 なんかおいしそう。
男 もんじゃ焼きみたいでおいしいですよ。
妹 いろいろと作られるんですね。
男 ん？ あ、もうぜんぜん。あとは目玉焼きと、焼肉と焼きそば。
ホットプレートしか使えなくて・・・、それで料理習おうかな
って。
妹 やさしいんですね。
男 いえ、そんなんじゃないなくて、食べることは生きることだから。
妹 え？
男 なにか？
妹 あ、いえ、あの父も私におんなじこと・・・。
男 あ、そうですか・・・。
妹 娘さん、おいくつですか？

男 Q才とㄩ才。
妹 そう、ふたつちがい・・・。
男 あ、おんなじですね。
妹 え？
男 お姉さんと・・・。
妹 ほんとだ・・・。
男 (ワインを飲む)
妹 あの・・・。
男 はい？
妹 娘さん、ふたりともパパの方を？
男 仕方がないですから。
妹 ・・・・。
男 ほんとは、別れたんじゃないんです。
妹 え？
男 去年、病気で・・・。
妹 え？あ、そうなんですか・・・。
男 なんかいちいち説明するのが面倒くさくって。別れたって言った方が簡単で、あと味も悪くないし・・・。
妹 そうですよね・・・。料理教室みたいな所で、質問される度に答えてたんじゃね・・・。うちのお姉ちゃんみたいなものもいる

し。

男 はい。・・・あ、すいません。

妹 うちとは反対ね。

男 なにがです？

妹 うちの子供の時に父親がいなくなっちゃって・・・。

男 ああ、亡くなられたんですか？

妹 ううん、出て行ったの。

男 え？

妹 母と別々に暮らすようになっちゃって。

男 ・・・・・・・・。

妹 ワイン、いっぱいあったでしょ。

男 あ、はい。

妹 この先楽しいことがあるたんびに、みんなで飲むんだあなんて
言ってたのに・・・。

男 ・・・・・・・・。

妹 私の♀才の誕生日の時に、♀才のお祝いに飲むワインプレゼ
ントしてくれて、だけど飲まずじまい・・・。

男 そうなんだ・・・。

妹 なんだか父がいなくなったらこの家にいるのが辛くなっちゃっ
て、で、早くに家出て、母が亡くなったら、また戻ってきて・・・。

男　　で、今はここで、
妹　　そう、今になってここでひとり。
男　　・・・・・・・・。

遠くからにぎやかな笑い声が聞こえてくる。
カズキ、椅子から立ち上がって、声のする方に近づいていく。声の中から
母が現われる。

母　　あら、こんなところで何してるの？
妹　　・・・・・・・・。
母　　パパがね、テープレコーダーに、みんなの声吹き込むんだって、
あの変な唄、教えてるの。もう、みんな大笑い、フフフフ……。

母、幸せそうな顔をして笑っている。

妹　　ママ、
母　　なに？

カズキ、母の顔をじっと見つめている。

妹・・・・・。

母 なによ？

妹 みんなここにいたのよね。

母 え？

妹 あの時、みんなここにいたのよね。

母 みんないるでしょ。

妹 ・・・・・。

母 カズキのそばに、パパもママも、みんないるでしょ。

妹 (うなづく)

母 おかしな子ね。

妹 ママ？

母 うん？

妹 パパのこと好きよね。

母 好きよ。

妹 ずっと好きでいてね、パパのこと。

母 え？

妹 ね、

母 うん。

妹 なにがあっても、ね。

母 (うなづく)

母、微笑しながら、声の中に入れていく。
カズキ、その母の後ろ姿をじっと見ている。

7 楽しかったさいごの日

父と母と姉と、叔父と叔母がテープレコーダーを囲んで、にぎやかに笑いながら話している。

叔母　もうやだ・・・。

姉　変な唄。

叔母　ほんと。

叔父　むずかしいなあ。

父　むずかしくなんかないさ、簡単、簡単。ミズキとカズキなんかすぐに覚えちゃったんだから。

姉　すぐなんかじゃないわよ、何回もやらされたんだから。

母　そうよね。

父　あのね、体で覚えると歌詞も自然に体に入ってくるわけだ。全部意味があるわけだから。いい、もう一回やるから、ちゃんと見ててよ。見ててよ。

父、振りをつけながら、歌ってみせる。

みんな真剣な顔をして、真似をする。

父 「L」はこっちみて、ルック アット ミー。そう、そう。
「O」はひとつ、オンリーワンってこと。これ、ワンちゃんね。

叔父 王選手。

父 そうそうそう。

「V」はベリ、ベリ、グッドのベリ、ベリ、腰で喜びをあらわすわけね。

「E」はやなときこうするのよ、

叔父 すいません。

父 はい？

叔父 これはどういう意味なんですか？

父 だから、やだなーだよ。いやになっちゃうなーの意味。

母 いやになっちゃうなー。

叔父 やっぱり、みんな意味があるわけなんだ。

父 そりゃそうだよ。意味があるんだよ。

口を横にして、イーって。もっと大きく、イーって。おばさん
凄いな。

「ラブ」をみんなにあげる、ギブ トゥ ユー。

「ラブ」はふたりだけの、ゲーム フォー トゥー。ちゃんと

やって。

「チュー」は心臓がドキドキ、「メー」がグルグルまわる、
「ラブ」はふたりで、ミー アンド ユー。

叔父 すいません。これはどういう意味なんですか？

父 意味ないの。あ、そう、そう。そんな感じ、そんな感じ。

叔父 できるかなあ。

父 大丈夫だって。振りは間違えたっていいんだって。歌を録音するんだから。

叔母 なんだかドキドキしちゃうわよ。

父 ね、チームワークが肝心だからね。こんなことって思っていると、声にでますよ。

叔母 はい、はい。

子供の姿のカズキ、やってくる。

父 じゃ、全員そろったところで、録音するとするか。じゃあ、ミズキとカズキはここで立って、みんなの前で立って踊りながら歌いまーす。

姉 えー、うそ。

妹 いやよ、そんなの。

父　　ぶつぶつ言わない。パパも踊るから。
姉　　なんで？声だけ吹き込むのに、踊りなんかいららないわよ。
妹　　そうよ。
父　　ムードだよ、ムード。
姉　　ムードって？
妹　　ヌード？
父　　ちがう、ムードだ。なんて言ったらいいの、これ・・・、
母　　感じ、楽しい感じ。
妹　　楽しい感じ？
母　　そう。
妹　　幸せって感じ？
母　　そう。
妹　　そうか。
父　　さあ、じゃあね、パパがテープまわすから、叔父さん、レコー
　　ドかけてくれるかな。
叔父　あ、はい。
妹　　おじさん、大丈夫？
叔母　間違ったら、どうしよう。
父　　いいの、いいの。間違ったら間違っただ、その時の雰囲気ので
　　て、またいいんだって。

妹　ちゃんと踊れないかもしれない。
姉　そうね、カズキへたくそだから。
母　大丈夫、ママがちゃんと見てるから。
父　だめ、だめ、見てるだけじゃ。全員参加なんだから。
母　私も？
父　そりゃそうでしょ。
姉　わー、ママもだー。
父　ちょっと静かにして。まわすからね、いくよ。

父、テープをまわすと、マイクで声を録音する。

父　えー， 6月9日　日曜日、ただいま時間は3時5分、お天気、
快晴。参加者、叔父さん、(叔父さんにマイクをむける)
叔父　はい。
父　叔母さん、(叔母さんにマイクをむける)
叔母　はい。
父　ミズキにカズキ、
妹　はい。
姉　はい。
父　ダイキー、

母　ダイキ。
父　そしてママとパパ。
母　はい。
父　ミズキとカズキの振りに合わせて、みんなで木の下で歌います。
　よし、準備完了。じゃ、そこに立って。
叔母　あー、なんかドキドキ。
母　フフフ・・・。
妹　ママ、ちゃんと見ててよね。
母　ちゃんと見てるわ。
姉　あたしのまねしないで、自分で踊るのよ。
妹　なんでまねなんかするのよ。
母　けんかしないの。
父　じゃ、針の音しないように静かにレコードに落として、じゃ、
　いくよ。はい。
叔父　（緊張して）はい。

レコードに針を落とすと、ナットキングコールが歌う『LOVE』が聞こえてくる。父のかけ声でミズキとカズキの振りに合わせて、みんな歌う。

父　英語のところは英語っぽくやるとかっこいいからね。

『 「L」はこっちみて、ルック アット ミー。
「O」はひとつ、オンリーワンってこと。
「V」はベリ、ベリ、グッドのベリベリ、
「E」はやなとき、こうするのよ、イーって。

「ラブ」をみんなにあげる、ギブ トゥ ユー。
「ラブ」はふたりだけの、ゲーム フォー トゥー。
「チュー」はドキドキ、
「メー」がグルグルまわる、
「ラブ」はふたりで、ミー アンド ユー。 』

父 みんなで立って、ここで踊りますよ。

間奏になると、みんなでテーブルのまわりを踊りながら回る。

『 「ラブ」をみんなにあげる、ギブ トゥ ユー。
「ラブ」はふたりだけの、ゲーム フォー トゥー。
「チュー」はドキドキ、

「メー」がグルグルまわる、
「ラブ」はふたりで、ミー アンド ユー。
フォー ミー アンド ユー。
フォー ミー アンド ユー。
フォー ミー アンド ユー。 』

叔父 ミー アンド ユー。
父 ないよ。
妹 叔父さん、間違った！

歌い終わると、みんながまんしきれなくなって、大声で笑いだす。

全員 ハハハハ・・・。
叔母 お兄さんの踊り、へんなんだもの。
母 ハハハハ・・・。
父 へんなんかじゃないよ、ね、
叔父 え？ええ、へんなんかじゃないですよ。
妹 ママ、あたしは？
母 よかった。
妹 お姉ちゃんより？

母 えーとですね、
姉 ばあか、あたしよりいいわけないじゃない。
妹 どうだった？
母 よかったです。
妹 ほらね。
姉 うそに決まってるでしょ。
妹 うそじゃないわよ、ね、ママ。
母 二人ともよかった。
妹 そうじゃなくて、どっちか。
父 も一、喧嘩しない。
叔母 ダイキもね、手動かしてたのよ。
母 あら、そう？
叔母 うん、踊ってた。
母 そう、踊ってたの。
父 そうか、踊ってたか、こいつ、ハハハハ・・・。
叔父 ハハハハ・・・。
父 やっぱり男はちがうよ、ハハハ・・・。

カズキ、うらめしそうに、ダイキの方を見ている。

叔母　ね、あなた、新しいカメラ持ってきたんでしょ。
叔父　え？　ああ。そうそう。
母　　あら、また買ったの？
叔母　そうなの。いくつあったら気が済むのかしら。
叔父　みんな違うんだよ、種類が。
父　　どれ？見せて、見せて。
叔父　これなんですけどもね、
〇〇　かっこいい。
父　　すごいじゃない。
叔父　まあ・・・。
叔母　結構したのよ。部屋に暗室まで作っちゃったんだから。
母　　そうなの？
父　　本格的だなあ。
叔父　たいしたことないですよ。
叔母　あるわよ。もう、こういうことばっかりにお金使っちゃって。
父　　いいじゃないの。子供がいると思えば、安いもんだよ。
母　　あなた。
叔母　・・・・・・・・。
叔父　写真撮りましょ、ね、写真、みんなで。
母　　あ、そうね。声も録ったんだから、写真も撮りましょ。ね、あ

なた。

父 あ、そうだな。そうしよう。

姉 叔母さん怒ってる。

父 しっ！・・・じゃ、どこで撮ろうかな、こっちかな、そうだな、
こっちで撮ろう。

父 はい、じゃあね、ダイキをまん中にして、ママここに座って。

妹 あ、じゃね、私はママのうしろのまん中。

父 あ、カズキはママの横だ、はい。

妹 なんで。

姉 私は？

父 ミズキは大きいから、ここに座って。

姉 うーん。

父 はい、叔母さん、叔母さんも怒ってないで、ほら。こっち。

母 ダイキもいれて、みんなで撮るのって、これがはじめてね。

父 そうだっけ？

叔父 あ、そうですね、この前撮った時、ダイキまだ生まれてなかったもん。みんな、もうちょっとくつついて。

木の下に、ダイキを抱いた母と父をまん中にしてみんな並ぶ。

父 ん、こんな感じ？
叔父 (ファインダーをのぞいて) あ、いい感じ、いい感じ。カズキ
ちゃん、笑って。
父 カズキ、笑うんだ。
妹 だって・・・。
父 だって、なんだ？
妹 ダイキ、まんなか。
父 ダイキのお祝いなんだ。そうだろう？
姉 そうよ。
妹 ・・・・。
父 ブスっとしない！
姉 ブスに写るわよ。
叔父 お前も、ブスっとしてないで。
叔母 ブスっとなんかしてないわよ。
母 カズキ、パパとママのまん中入りなさい。
姉 あたしは？
母 ミズキ、お姉ちゃんでしょ。
父 じゃ、こっち来なさい。
妹 いい、あたし、はしっこで。
姉 じゃ、あたし、まんなか。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。

叔父 カズキちゃん、笑って。

父 カズキ、笑うんだ！

母 あなた！

妹 （下を向いて涙ぐんでいる）

姉 カズキったら泣いてる。

母 え？

父 カズキ、お祝いなんだ、泣くやつがあるか。

妹 ウッ、ウッ、

父 泣くな。

妹 ウワーン。

姉 泣いた。

父 泣くんじゃない！

母 あなた！

叔母 もう ・ ・ ・ ・ 。

叔父 いいよ、泣きたかったら、泣けばいいさ。

父 よかないよ。こういう時に限って、この子はいつももう ・ ・ ・ ・ 、

叔母 あなた、早く撮っちゃってよ。

叔父 じゃ、いくよ。

叔父、セルフタイマーのスイッチを押す。

叔母 あなた、早く、早く。
父 カズキ、笑って、笑うんだ！
妹 ウワーン。
父 カズキ！
妹 ウワーン！

カメラのシャッターの音がする。

叔母 はー。
叔父 もう一枚。
叔母 もういいわよ。
姉 あーあ。
妹 ・ ・ ・ ・ ・。
叔母 あーあ、なんだか喉かわいちゃった。
母 なんか冷たいもの持ってくるわ。
叔母 私、お水でいい。
母 あなたは？
父 ワインかな。

母 まだ飲むの？
父 飲みなおし。ね、飲もう。
叔父 え？あ、はい。
叔母 私も飲もうかな。
母 じゃ、ワインね。
母 ミズキとカズキは？
姉 あたし、オレンジジュース。
母 カズキは？ ジュースがいい？
妹 いない。
母 パイナップルジュース、冷えてんのよ。
妹 いない。もう。
父 ママ、我が家にはもう二度とパイナップルジュースは置かなくていいから。
母 全部捨ててこよう。
妹 ウワン・・・。パイナップルー。

姉 さっきの写真の顔ブスね、きっと。
妹 だって、あたし、今、世界中でいちばんみにくいもの。
姉 そうなの？

妹 かわいくないもん。
姉 そうね。
妹 そう思う？
姉 なんか、にくたらしい。
妹 やっぱりそうか・・・、ダイキなんかすごいかわいいのに・・・。
姉 そりゃそうよ、人生の中でいちばんかわいい時だもの。
妹 パパ、今、ダイキのこといちばん好きよね。
姉 たぶんね。
妹 その前はあたしのことがいちばん好きだったのに・・・。
姉 その前はあたしよ。
妹 え？
姉 いちばん下がいちばんかわいいの。そういうもんなの。
妹 ダイキが生まれなきゃ、あたしずーといちばん下だったのに。
姉 仕方ないわね。
妹 ダイキなんて、いなきゃよかったのに・・・。
姉 でも、男の子はそのうちきたなくなるから、逆転するかもね。
妹 ほんとに？
姉 うん。
妹 ね、いつきたなくなるの？
姉 ヒゲが生えたら。

妹　　いつ？
姉　　そうね、うちのクラスの子で生えてるやつがいるから、あと12年ぐらいしたら。
妹　　なんだ、そんな先？
姉　　そうよ。
妹　　ヒゲが生えたら、パパ、ダイキのこと嫌いになる？
姉　　たぶんね。
妹　　今すぐ生えてこないかなあ・・・。
姉　　そんなの無理よ。あきらめなさい。

姉、ジュースを飲みにテーブルの方に行く。
カズキ、ダイキの顔に近づいて話しかける。

妹　　今すぐヒゲが生えてきますように。それが無理だったらどこかに消えていなくなりますように。あんたなんか、消えていなくなっちゃえばいいんだわ・・・。

8 もしも弟が消えていなくなったら

振り向くと、ひとりテーブルに座っている父親のところに叔父と叔母がやってくる。

叔父 いやあ、びっくりしました。

叔母 家出だなんて、ほんとなの？

父 まさかとは思ったんだけど、置き手紙があってね。

叔父 置き手紙？

父 これ。(胸ポケットからだして渡す)

叔父 『ボクはボクだからボクになる』

叔母 どういうこと？

叔父 そういうことだろう。

母、白ワインの入った水を持ってくる。

叔母 姉さん、大丈夫？

母 手紙みたら、なんかほっとしちゃって。

叔母 え？
母 あの子らしいなって。
叔母 そんな、まだ歩けるようになったばかりなのよ。それで家出だなんて。
父 男っていうのはね、自分の足で歩けるようになったその日から、家を出ることを考える。そうやって父親を越えていくのさ。
叔父 （目をうるませて手を差し出す）
父 なに？
叔父 なんだか今の話、感動しちゃいました。
父 そう？ （固く握手）
叔母 誘拐なんじゃないの？
母 私もね、最初はそう思ったんだけど、
父 僕もね、こりゃ誘拐じゃないかってそう思ったよ。子供ができない夫婦がさ、思い悩んでね、三人もいるんだもの、ひとりぐらいいいんじゃないのて、車にヒョイとのっけちゃってさ。
叔母 ね、なんで私の顔見て話すの。なんでよ。
叔父 おい！
母 なんの意味もないわよ。
父 ハハハハ・・・。
叔父 でも、もしかしたらこの手紙、脅かされて書いたってことも、

叔母 そうよ、あるかもしれないわ。
母 でも、いろんな色を使って、こんなにきれいに書いてあるのよ。
父 計画的としか思えないな。
母 部屋だってきちんと掃除してあるし、おしめだって洗濯してアイロンかけてあるのよ。
叔母 えー。
父 あいつ。
叔父 そうか・・・、今頃、海の上かな。
父 え？
叔父 やっぱり、こういう時って、そうでしょ。
父 そうか、男だから、やっぱりそうかな。
叔父 9年後に真黒に日焼けして帰ってくる。
父 「オヤジ、オフクロ、ただいま！」なんてね。
母 いやだ、あなたったら。
父 でもねその時は、ヒゲづらだから、もう家になんか入れてなんかやるもんか、ハハハハ・・・。
母 汗臭いしね、ハハハハ・・・。
叔父 そうだな、ハハハハ・・・。
叔母 かわいそうにね、ハハハハ・・・。

9 弟が消えた夕方

カズキ、木の下に寝転がって空を見ている。

妹 あんたにヒゲが生えたら、みんなに汚い汚いって嫌われちゃうのよ。そしたら、パパ、ダイキよりもあたしの方が好きになっちゃうんだわ、きっと……。

母 カズキ、カズキ。何言ってるの。

妹 あのね、ダイキにヒゲが生えたら、みんな汚い汚いってダイキのこと嫌っちゃうの。かわいそうね。

父 何言ってるんだ。

母 叔父さんと叔母さんそこまで送ってくるから、ちょっとダイキのこと見ててくれる？

妹 お姉ちゃんは？

母 友だちのところでね、宿題する約束してたんだって、あわてて出てっちゃったの。

妹 また逃げた。片づけるのいやなものだから……。

母 すぐ戻るからちょっと見ててね。

妹 (うなずく)
叔母 (籠の中のダイキをのぞいて) ダイキちゃん、またね。
母 そのね、庭の門を出て、下がったところの土手なの。すごい
きれいな花が咲いててね。
父 ね、今日の写真できたらさ、焼き増ししてくれる？ あんまし
うまく写ってないと思うんだけど・・・。
叔父 ああ、いいですよ。
父 ごめんね、ありがとう。

叔父、寝転がっているカズキに近づくと、ひそひそ声で言う。

叔父 また、こっそり家抜け出して泊まりにおいで。叔父さん待つて
るから。
妹 (うなずくと、寝たまま手だけ振る)

カズキとダイキだけが庭に残る。

妹 みんな行っちゃった・・・。パパもママもいないと、なんかこ
の家って、よそんちみたい・・・。

ダイキの泣き声が籠の中から聞こえてくる。

妹　泣かないの。なんで泣くの？　みんな、あんたのこと好きなのよ。泣く理由なんてなんにもないじゃない。泣きたいのは、こっちの方よ。

泣き声が大きくなる。

妹　どうして泣くの？　ね、どうしたの？　ダイキ、どーしちゃったの？

カズキ、立ち上がると、籠の中のダイキをのぞきこむ。ダイキ、ぐったりしている。

妹　ダイキ……。どうしたの？ね、ダイキ、ダイキ……。

カズキ、足を震わせながら、ダイキをじっと見ている。

妹　ママ、ダイキがへん。ママ、ママ……。

カズキ、みんなを呼びに走っていく。

暗転。

♀ ママがパパを嫌いになった日

父と母、叔父と叔母、姉とカズキ、みんなで食事の準備をしている。

叔父　これ。

母　まあ、こんなに？　喜ぶわ、ありがとう。

叔父　ローストビーフ。

母　まあ。

姉　叔父さんがつくったの？

母　すごいね。

叔母　もう大変だったんだから。台所まっ黒にしちゃって。

叔父　いやあ、肉の油があんなに火がでるなんて思いませんでしたよ、
ハハハハ・・・。

母　火事にならなくてよかったわ。

叔母　そうなのよ。

叔父　タコ糸の巻き方がローストビーフって難しいですね、牛肉の繊

維に交差するように巻きつけるんですしたっけ？教わったようにやってみたんですけどね・・・。

叔母 もう、この人ったら、料理っていうよりなんか工作でもしてるみたいだったのよ。

叔父 ハハハハ……。まあ、ひとつ食べてみてください。（皿に盛って）どうぞ。

父 あ、ありがとう。

叔父 お姉さんも、どうぞ。（皿に盛る）

母 ありがとう。

叔母 どう？

父 うん。

叔母 いけるでしょ。

母 ほんと、おいしい。

叔母 ね、私もびっくりしちゃった。

叔父 （子供達に）食べてみるか。

姉 うん。

妹 ……。

叔父 カズキちゃん、ローストビーフ食べてみるかい？

妹 （首を横に振る）

叔父 そうか。そうかなって思って、叔父さんね、ほら、砂肝こんな

に買って来たんだ。

母 良かったね。

叔父 好きなだけ食べていいんだよ。

妹 ……。

父 カズキ、お礼は。

妹 ありがとう……。

叔父 いいんだよ。お礼なんて。叔父さんも食べたかったんだから。おいで。

叔母 叔母さんもね、ふたりのために作ってきたのよ。ほら、ケーキ。

姉 うわあ、すごい。

母 おいしそう。

叔母 でしょ。その辺のケーキなんかよりずっとすごいんだから。

叔父 やー、もうびっくりしましたよ。ケーキっていうのは、砂糖、玉子あんなに使うんですね。

叔母 ケーキなんて作るのはじめてでしょ。あんなに使うなんて、ほんとびっくりしちゃった。

姉 カズキ、玉子だめなのよ。

叔母 えーっ。でも、ケーキはねえ。

母 だめ。

叔母 え、そうなの……。

姉 お豆腐にジャムつけて食べるの。
叔母 えー、そうなの？
叔父 じゃ今度はお豆腐買ってこよう、ね。そうか、ジャムつけて食
べちゃうのか、ハハハハ・・・。
叔母 ハハハハ・・・。
母 写真持ってきてくれた？
叔父 え？
叔母 写真って？
叔父 この前の、みんなで撮った・・・。
叔母 あなた・・・。
父 ・・・・。
母 私が頼んだの、見たいからって。
叔母 でも・・・。
母 見せて。
叔父 (写真をとりだして母に渡す) これです・・・。
母 (写真を手にして) あらあ、みんなよく撮れてる。
姉 見せて。あ、カズキやっぱりへんな顔。
妹 ・・・・。
母 ダイキ、ちゃんと写ってる。
父 ・・・・。

叔母 (涙ぐんで) うっ。
叔父 おい・・・。
叔母 (泣きだす) うっ、うっ・・・。
叔父 (耳もとで) 泣くなって言ったろう。
叔母 だって、写真なんか見たら・・・。
母 よかったわ、あの時撮ってもらって。ダイキ、みんなと一緒に撮ってもらってよかった・・・。
父 ……………。
叔母 あの時具合悪かったなんて、ぜんぜん気がつかなかった・・・。
母 ……………。
父 ……………。
叔父 おい！
叔母 え？あ、あの時はなんともなかったのよね。笑ってたもんね。
母 笑ってなかった。
叔母 え？
母 笑わなかったの。私が抱きあげるといつも笑うのに、あの時笑わなかった・・・。
父 ……………。
母 どうしたのかなって思ったの・・・。
父 ……………。

叔母　でも、笑ってなかったからって言って、ねえ……。

叔父　え？ああ……。

母　私の顔じっと見てたの。なにか言いたそうに……。

父　……………。

母　なのに私ったら……、

父　ね、こっちのワインも飲んでみて、なかなかいけるから（叔父のグラスにワインを注ぐ）。

叔父　……………。

母　どうして、どうしてなんにも言わないの？

父　……………。

母　言ってよ。私になんで気がつかなかったんだって。お前のせいだって言ってよ。

父　そんなこと思ってないったら。

母　じゃ、どうしてダイキのこと話さないの。まるではじめっからあの子がいなかったみたいな顔して……。いたのよ。あの子、ほら、ほら、ちゃんと私たちの前にいたのよ。

父　いい加減にしないか！

母　……………。

叔父と叔母、硬い表情をしたままじっとしている。

母　私に腹をたててるんでしょ。私のこと許せないんでしょ。
父　そんなこと思ってないさ。
母　思ってるくせに。
父　・・・・・・・・。
母　お前のせいだっちはっきり言ってよ。その方がどんなにか……。

母、泣きながら席を立つ。

叔母　姉さん！

叔母、母のあとを追う。
父と叔父、黙ったままうつ向いている。

叔父　あの……、
父　・・・・・・・・。
叔父　その、なんて言ったらいいかわかんないんだけど、
父　・・・・・・・・。
叔父　おんなじ気持ちなんだと思います。だから、一緒に泣いて欲しいんですよ……。

父 悪いんだけど、
叔父 え？
父 帰ってくれないかな。ほんと……。ほんと悪いんだけど……。
叔父 ……。

叔父、一瞬子供達の方を見ると、うつ向き、その場を去っていく。
父、重い空気の中、じっとしたまま椅子に座っている。

妹 パパに話さなきゃ。
姉 なにを？
妹 あたしのせいだって。
姉 え？
妹 あたし、ダイキがいなくなればいいって、ずっとそう思ってた……。
姉 だからって……。
妹 あの時、あたしダイキに言ったの。消えちゃいなって……。
姉 そうなの？
妹 (うなづく)
姉 そうなんだ……。
妹 パパに言わなきゃ。

姉　だめよ。そんなこといったら、パパあんたのこと、
妹　一生嫌いになる？
姉　たぶんね。
妹　でも、言わなかったらパパ、ママのこと一生嫌いになるわ。マ
マだって・・・。
姉　そうかもね・・・。
妹　話してくる。
姉　だめよ、だめだってば・・・。

カズキ、父親に近づいていく。

妹　パパ・・・。
父　・・・・・・・・。
妹　パパ・・・、
父　パパ、だめだな。ママの方がずっと悲しいのにな。ミズキだっ
て、カズキだってな。
妹　パパ、あたしね・・・。
父　・・・・・・・・。
妹　あたしね・・・。

カズキ、涙がのどをふさいで言葉がでてこない。
父、声を殺して泣いている。
姉が近づいてくる。

姉　カズキ。
妹　・・・・・・・・。
姉　いらっしやい。
妹　・・・・・・・・。
姉　・・・・・・・・。

カズキ、父親のそばを離れ、ミズキに泣きながら抱きつく。
父親、ひとり泣いている。父親、出ていく。
見送るミズキとカズキ。

姉　カズキ……。カズキ。

1 パパが帰って来ない日

姉、料理を皿に盛っている。カズキ、それをテーブルに並べている。

妹 パパ、今日も遅いね。

姉 そうね。

妹 ママ、パパのこと嫌いになる？

姉 なるかもね。

妹 嫌いになったらどうなる？

姉 どうなるって？

妹 別れる？

姉 かもね。

妹

姉 パパとママ別れたら、どっちと暮らす？

妹 どっちって？

姉 どっちか選ばなきゃいけないのよ。

妹 いやよ、そんなの。

姉 いやでも、どっちかとしか暮らせないのよ。

妹 お姉ちゃんは？
姉 そうね・・・、ママかな。
妹 なんで？
姉 ママ、女だから。
妹 そっか。じゃ、あたしも女だからママ？
姉 あんたはパパ。
妹 そうよね。パパ、ひとりじゃかわいそうだもんね。
姉 そうね。
妹 じゃ、あたしとお姉ちゃん、別々に暮らすのね。
姉 そういうことね。
妹 お姉ちゃん・・・。(涙ぐんで姉のスカートをつかむ)
姉 おじさんちの子になるって言ってたくせに。
妹 ひと晩だけって決めてたもん。
姉 なによそれ。・・・もう。
妹 ね、ママ、パパと別れたら誰か別な人と結婚する？
姉 そうね、誰かママのこと好きになる人がいたら、結婚するかもね。
妹 そうなの？
姉 だって女はひとりじゃ生きていけないもの。
妹 そうか・・・。じゃ、パパは？

姉 そうね・・・、
妹 パパは誰とも結婚しないと思う。
姉 なんで？
妹 だってパパ、ママのこと好きだもん。
姉 そうね、そうかもね・・・。

母、できあがった料理を持って、テーブルにやってくる。
姉とカズキ、突然話すのをやめる。

母 なに？
姉 え？
母 どうかした？
妹 ううん。
母 （料理をテーブルの上に置いて）さあ、できた。
姉 すごーい。
妹 いただきます。
母 さあ。
妹 いただきまーす。
姉 いただきまーす。
母 どうぞ。

妹 おいしい！

母 おいしい。

三人、椅子に座ると黙って食事をはじめる。

妹 パパ、遅いね。

母 そうね。

妹 おいしいのにね。

母 そうね・・・。

〈間〉

妹 ママ・・・。

母 ん？

妹 パパのこと好きよね。

母 ・ ・ ・ ・ ・ 。

妹 好きよね。・・・好きよね、パパのこと。

母 好きよ。

妹 （姉の顔を見て笑う）

姉 ・ ・ ・ ・ ・ 。

母 パパ、ママのこと好きかな？
姉 え？
母 好きかな、ママのこと……。
姉 ……。
妹 好きよ、ママのこと。
母 ……。
妹 パパ、ママのこと好きよ。
母 ん？
妹 好きよ、ママのこと。
母 そう？
妹 うん。ね、
姉 うん……。
母 そう、よかった……。

父のいないテーブルで、三人で食事をしている。
門が開く音がする。

妹 あ、パパだ。パパー！
母 ……。

カズキ、門の方に駆けていく。叔父と一緒に戻ってくる。

妹 叔父さんだあ。

母 あら・・・。

叔父 ごぶさたしちゃってます。

母 ほんと。ひとり？

叔父 ええ。ちょっとこれ、友人からでっかいの4匹も貰っちゃって。
おすそ分けと思って・・・。

母 なに？

妹 なに、なに？

カズキ、箱のふたをあける。

妹 うわあ、ザリガニ！

姉 ばあか。

叔父 イセエビ。

妹 イセエビ？

母 まあ。

姉 すごい。

妹 でっかい。これって食べられるの？

姉 あたりまえでしょ。
叔父 お兄さんは？
母 あ、仕事でね、遅くなるみたい。
妹 ここんどこずっと遅いの。
姉 しっ！
妹 ……。
叔父 そう……。おねえさん、ちょっと……。
母 ん？
叔父 ちょっと。
母 なに？

叔父、子供達から離れて母に何やら話している。
カズキと姉、エビを見ているふりをして、ふたりの様子を遠くからうかがっている。

妹 お姉ちゃん……。
姉・妹 え、えええええ！
妹 （叔父さんを真似して）だいじな話があるんだ。
姉 （母親を真似して）なに？
妹 逃げよう。

姉 そんな・・・。
妹 誰にもじゃまされない所で、ふたりで暮らそう。
姉 でも、あの子たち・・・。
妹 大丈夫。毎日ごはん食べてりゃ、すぐ大きくなるさ。
姉 それに、あの人・・・。
妹 大丈夫。毎日ワイン飲んでりゃ忘れるさ。
姉 そうね。
妹 さ、行こう。
姉 うん！ うんうんうん・・・。

カズキ、心配になって母のところに駆け寄っていく。

妹 ママ・・・。

母と叔父、振り返る。

母 カズキ。
叔父 カズキちゃん・・・。叔父さんね、
妹 ・・・・。
叔父 叔父さん、パパになるんだ。

妹　　うちのパパに？
母　　なに言ってるの、この子。
叔父　　ハハハハ・・・。
母　　叔母さん、赤ちゃんができたんだって。
姉　　え、そうなの？
妹　　・・・・・・・・。
母　　よかったわね。何ヵ月？
叔父　　4ヵ月。
母　　え？なんで、もっと早く教えてくれなかったの？
叔父　　いや、その・・・。
母　　気を遣わなくっていいのに。
叔父　　いや、そんなんじゃなくて・・・、
母　　ほんと、よかった。お祝いしなきゃね。
妹　　うん、叔父さん、ここに座って。ここ、ここ。
叔父　　でも、今日は、これで・・・、
母　　あら、もう？　そう・・・。
叔父　　今度、ふたりでゆっくりとおじゃまします。
母　　そう、じゃ、そうして。
叔父　　じゃ。

カズキ、叔父のあとを追いかけていく。

妹 叔父さん。 (姉 ママ、見て)
叔父 え？ (母 うーん？)
妹 もう、あたしのこといらなくなるね。
叔父 ママが寂しがるから、そばにいてやらなきゃ。
妹 うん……。バイバイ。
叔父 バイバイ。
妹 ……。

後で母の笑い声が聞こえる。

姉 ママ、このエビ値段ついてる。
母 あらほんと。あら、おじさん、ハハハハ……。

㉔ パパとさいごの食卓

ミズキとカズキ、二人でテーブルで話をしている。

ミズキ、奥へ走って行って

姉 カズキ！ カズキ、パパ帰って来たよ。早く！

妹 パパ！ パパー！

父 よーし、バーベキュー焼くぞ。カズキ、火をつけて。

妹 あ、あたしやる。・・・・・・こうやって回すんだよね。

妹 お姉ちゃん見て。パパのバーベキューどれもでっかい。

姉 そりゃそうよ、パパ男だもん。

妹 そうね、男だもんね。

妹 ひさしぶり。

父 え？

妹 こうやってパパと一緒にごはん食べるの、ひさしぶりよね、ね。
姉 うん、そうね。
父 そうだな・・・。
妹 パパ、元気だった？
父 え？ああ。
妹 あたし、元気じゃなかった。
父 そうか。
妹 ママも。
父 ・・・・。
妹 ママ、遅いね。
姉 どこ行ったんだろう。パパ、せっかく早く帰って来たのに・・・。
妹 帰って来たら、びっくりするよね、ね。
姉 うん。
父 （焼いている肉が手に触れて）あ、あつい、あつい！
姉 ハハハハ・・・。
妹 あー、パパ大丈夫？
父 大丈夫、大丈夫。よーし、このくらいでいいか・・・。お皿と
って。

姉、皿を取りに行く。

カズキ、それを取り返す。

妹 あたし、あたし。あたしがやる。

姉 もう・・・。

妹 パパ！（父に皿を渡す）はい。

父 （皿に盛る）先に食べてるか。

姉 うん、食べてよう。

妹 ママは？

姉 大丈夫。ママよく言うじゃない。「いいから、先に食べてて」
って。

妹 言う、言う。「いいから先に食べてなさい」って。

父 ハハハハ・・・。じゃ、先に食べてよう。またあとで焼けばい
いから。

三人、テーブルに座る。

姉 いただきます。

妹 いただきます。あ、あつ、あつい！

姉 ん、おいしい。

父 そうか、おいしいか。

妹 おいしい。バーベキューずっとやってなかったもん、ね。
姉 そうね。
父 カズキ、それ牛だぞ。
妹 あたしね、牛食べられるようになったの。
父 そうか。
妹 この前なんてね、豚も食べられた。
父 そうか、あとは鳥だけだな。
妹 そう。
姉 無理ね、カズキは鳥と玉子は絶対に無理。
妹 そんなことない。
姉 そんなことある。
父 なんでも食べられるようにならなきゃ、食べることは生きることなんだから。
姉 食べてれば生きていけるの？
父 そう。食べてれば大丈夫。
妹 どんないことがあっても？
父 ああ。
妹 どーんなに悲しいことがあっても？
父 ああ。
妹 なんかわかる。

父 え？
妹 だってあたし、パパいない時なんかいっぱい食べた。ね。
姉 そう。カズキったらすごい。食べすぎて何回もおなか痛くしてんの。
妹 だって、あたしがいっぱい食べるとママすごい元気になるんだもん。
父 そうか・・・、ママ、元気になるか・・・。じゃあ、パパいなくても、ミズキとカズキがいればママ大丈夫だな。
妹 え？
姉 パパ、いなくなるの？
父 パパね、今度、仕事で遠い所に行くことになったんだ。
姉 遠い所って？
妹 誰にもじゃまされないところ？
父 え？
姉 なに言ってんの。遠い所って外国よ、でしょ。
父 うん。
妹 パパひとりで行くの？
父 うん。
妹 なんで、なんでみんなと一緒にいかないのよ？
父 どんな所かよくわかんないし、ママ、この家離れたくないって。

妹 えー、そんなのいやよ。だったらあたしパパと一緒に行く。
父 ママは？ ママはどうする？
妹 だって、パパひとりじゃかわいそう。
父 カズキと離れたら、ママもってかわいそうだ。
妹 ……。
父 ミズキとカズキはずっと一緒にいなきゃ、そうだろう？
妹 (姉の方を見て) うん…。
姉 ……。
父 ママが来たいって言ったら、いつでもおいで。パパ待ってるから。
姉 ……。
妹 ママ、絶対行くよね。
姉 え？
妹 すぐに来たいって言うよね。
姉 ……。
妹 ね、
姉 うん…。
妹 ……。

〈間〉

父 うん、うまい。うまいな。熱いうちにこれ食べてごらん。(ふたりの皿にとってやる) ほら、どうだ。

姉 うん・・・。

妹 ・・・・・。

父 カズキ、食べてごらん。おいしいぞ。

妹 なに、これ？

父 手羽先。

姉 あ、鳥だあ。

妹 ・・・・・。

父 おいしいのに、な。

姉 うん。

父 ほら、食べてごらん。食べてみていやだったら、嫌いになればいい。うん？

カズキ、うなずくと手羽先を口にする。

姉 ああ、食べた。

父 どうだ？

妹 (黙ったまま噛んでいる)

父 うん？
妹 (うなずく)
父 そうだろう。パパの言った通りだろう。
姉 テバサキって鳥のどこ？
父 え？手羽先っていうのはね、鳥の羽の先っぽの骨だ。(手を羽
にしてみせて) ここだ、ここいら辺だ。
妹 うっ・・・。
父 カズキ、吐くな、吐くんじゃない。
姉 飲みこんじゃいな。
父 ガンバレ！
妹 (飲みこむ)
父 よし、やった！
姉 カズキったら、へんな顔してる、ハハハハ・・・。
父 ハハハハ・・・。
妹 ・・・・・・・・。

カズキ、下を向いたまま、涙がでそうになるのをがまんしている。
庭の奥に、母が立っている。
父、それに気がついて、じっと見ている。

姉 あ、ママだ！
妹 （母の方を見る）
姉 ママ、カズキね、鳥食べたのよ。

カズキ、胸がつまって泣きだす。

母 奥へ去っていく。

父 カズキ・・・。

カズキ、泣きながら遠くの方に駆けだしていく。

カズキ、ひとり泣いている。

父ともう会えなくなるのではという思いと、父と母が別れてしまうのは自分のせいなのではという思いと、今ある幸せをずっと、とどまらせておきたいという思いとが、胸のなかでいっぱいになり、涙がこぼれてくる。

Ⅲ 出会ったその日 part 3

姉 カズキ、カズキ！西条さん、お帰りになるんですって。

カズキ、奥へ走り去る。

姉 あ、ちょっと、いやだもう、あの子ったら、どうしちゃったのかしら？あの子って昔から変なんだけど、今日はなんだかとっても変。フフフ・・・。

男 すいません。こんなに遅くまで。

姉 ううん、こんなに楽しかったの、ほんと久しぶり。

男 なんだか随分ごちそうになっちゃって・・・。

姉 あの子ったら、次から次へと料理作っちゃって、止まらないって感じだったわね。

男 でも、ほんとおいしかったです。とっても。

姉 そう。・・・でも、今夜は何だか不思議だったわ。

男 なにがです？

姉 西条さんとお話してるうちに、父親と話しているような気分に

だんだんなっちゃって。

男 は？

姉 いろんなこと思い出しちゃった……。

男 そうですか。

姉 カズキ！ カズキ！

男 あ、あの、ほんといいですから。僕はこの辺で。

姉 いやだあの子ったら、どうしちゃったのかしら？ 西条さんのことすごく気に入っちゃったんだわ。

男 え？

姉 私、あの子のことならなんだってわかっちゃうの。

男 ……。

姉 あの一、もしよかったら、また是非会ってあげて、ね。

男 はい。こちらこそ。じゃ、よろしくお伝えください。

姉 はい。よろしく、しっかり伝えておきます。

男 じゃ。

男、ていねいにお辞儀をすると帰っていく。

姉の後にカズキが立っている。

姉 うわ、あ、やだ、びっくりした。

妹 ・ ・ ・ ・ ・。
姉 もう、どうしてちゃんとお見送りしないの。
妹 なんだか見たくなくて、この家から出ていくところ・ ・ ・。
姉 パパの時みたいにな？
妹 え？
姉 変な子ね。

ふたり、テーブルの上を片づける。

妹 こんなにお皿使ったの、はじめて。
姉 え？
妹 こんなにあるなんて知らなかった・ ・ ・。
姉 ・ ・ ・ ・ ・。
妹 お姉ちゃん。
姉 なに？
妹 みんなここにいたのよね。
姉 え？
妹 あの時、みんな、ここにいたのよね。
姉 うん・ ・ ・ ・ ・。

カズキ、遠くの方をじっと見つめている。

4 みんなで木の下で

カズキ、レコードに針をおとす。

遠くの方から、あの頃聞いた『LOVE』の曲が聞こえてくる。

妹 (曲に合わせて振りを踊る) やだ、おぼえてる。

目を閉じて、その音をたどっていくと、そこには陽だまりがあり、木の下には食卓(テーブル)がある。その食卓(テーブル)には、あの頃の父と母と姉と、叔父と叔母が座

っていて、みんな笑っている。

母がカズキに気がつき、手招きする。

カズキ、みんなのいる陽だまりの中に入っていく。

母 あら、こんなところで何してたの。パパがね、テープレコーダーにみんなの声吹き込むんだって、あの変な唄教えてるの。もう、みんな大笑い。フフフ……。

叔父 カズキちゃん、またこっそり家抜け出しておいで。叔父さん、

待ってるから。

叔母 おばさん、カズキのこともらっちゃおうかな……。

叔父 おい。

叔母 冗談、冗談よ、フフフフ……。

父 カズキ、食べてごらん。パパがおいしいって言ってるんだ。絶対においしいぞ。

母 いやだ、カズキったらまた足の裏まっ黒にして。外で遊んだら洗いなさいって、ママ言ったでしょ。

姉 ばあか、またママに怒られてんの。

父 さあ、みんないいかな、覚えたかな？

叔母 えー、ちょっと待って。

叔父 大丈夫かなあ。

父 大丈夫、大丈夫。間違ってもいいんだから。歌じゃなくてね、気分を録るんだから。今日のこの日のこの気分をね。じゃ、行くよ。

叔母 うわー、なんかドキドキしちゃう。

父 ちょっと静かにして。

母 フフフ……。

父 ママ、笑わない。

父 ミズキとカズキ、ふざけてないで。「えー、みんなで木の下で、

ミズキとカズキの振りに合わせて、歌います。参加者、叔父さん、叔母さん、パパ、ママ、ミズキにカズキに、そしてダイキじゃ、いくよ。さん、はい。

音の中、陽だまりと一緒にみんな消えていく。
カズキ、庭のテーブルにひとり座って、テープレコーダーから聞こえてくる、あの頃の家族の声に耳をすましている。

エピローグ

木の下の食卓(テーブル)で、中年を過ぎた男と女が食事をしている。

男 ありがとう。

女。

男 あ、ぼくが。

女 いいの、いいの。私は慣れてるから。

男 いいから。

女 ほんとにいいの。

男 いいから、

女 いやだ。

男 君はいつまでたっても。

男 で、話ってなに？

女 それがね、ずっと考えてて、やっと決心がついたのに。

男 なに？

女 その気が変わっちゃったみたい。
男 え？
女 あなた、どう思う？
男 どう思うって言われたって、気が変わる前も、変わった後も、
なんの話だか聞いてないから、さっぱりわかんないよ。
女 そりゃそうだよね、フフフ……。
男 笑ってないで、なにが、どう変わったの？
女 あのね、やっと決心がついて、この家売ろうと思ったの。
男 そうなの？
女 やだ、びっくりしないでって。もうその気が変わっちゃったん
だから。
男 あ、そうか。
女 買い手も決まって、だから今日、あなたをこの家に招いて、最
後の晚餐と思ったの。
男 そうなの？
女 だから、びっくりしないでったら。もうその気が変わっちゃっ
たんだから。
男 そうか。じゃ、売らないことにしたんだ。
女 そう。
男 それで？

女 それでって？
男 だから、そのあとの話はないの？
女 え？
男 ないの？
女 あるの。
男 なに？
女 あのね、
男 うん。
女 その・・・、ね、恥ずかしいわ、ちょっと食べながら聞いてて。
男 食べながらって言ったって、、もう食べるものないよ。
女 あら、ほんと・・・。じゃ、飲みながら聞いてて、私の方見ないで。そっち向いて。
男 こう？
女 そう。
男 どうぞ。
女 あのね、
男 ん？
女 その・・・、よかったら、この家に一緒に住まない？
男 誰が？
女 あなたが？

男 誰と？
女 私と。
男 ふうん。
女 ふうんって。いや？
男 いやな訳ないさ。僕は、もうずっと昔に君にプロポーズして、
「ちょっと待ってて」って言われて、今日までずっと待たされてたんだから。
女 そうだったわね。フフフ・・・。
男 フフフじゃないよ。
女 じゃ、いいのね。
男 ああ。
女 ほんとに？
男 うん。
女 そう、よかった・・・。じゃ、乾杯しましょ。
男 そうだね。じゃ、乾杯。
女 乾杯。

ふたり、ワインを口にする。

女 でも、不思議ね。

男 なにが？
女 今日、あなたの顔見るまで、こんなこと話すなんて思ってもみ
なかつた。
男 そう・・・。
女 ほんと、あなたって不思議。なんだかいろんなこと思い出しち
やって・・・。
男 いろんなことって？
女 いろんなこと・・・。あ、そう、そう。あなたの話ってなに？
男 ん、もう、もういいや。
女 よくなんかないわ。なに？
男 いや、だから・・・、君にプロポーズ断られたら、料理だけで
も作らせてもらいたいって頼もうと思って。
女 え？
男 娘達が大きくなって、家出て行っちゃったら、毎日ホットプレ
ートで目玉焼きばかり作っててさ。
女 やだ。せっかく料理習ったのに。
男 いや。だから、これからは君のために料理作らせてもらえない
かなって。
女 光栄です。じゃ、これから毎日頂きます。
男 じゃ、毎日目玉焼き作るから。片方の目玉食べてね。

女 何言ってるの。私が玉子だめなの、わかってるくせに。
男 食べてから嫌いにならなきゃ。なんでも食べれなきゃ。食べる
ことは……、
女 生きることだから？
男 そう。
女 ハハハハ……。
男 ハハハハ……。
女 あ、そうだ。
男 何？
女 ちょっと飲んでて。

女、マイクスタンドの前に立つ。

女 彼は、私の心のすべてを知っていたのだと思います。
だから、私の心が癒される日が来るまで、
ずっと待ち続けてくれたのでしょう。
父と母が過ごした、
私の子供時代の家族が過ごした
この古い家で、
長いことひとりで暮らし、

人生あともうわずかとなった今、
彼と二人で、
新しい生活を始めてみようと思います。

庭に 食卓(テーブル)をだして、
彼とふたりで食事をしていた時、
ふと気がついたのです。
彼は父でもなく、弟でもなく、
私を、子供の時から見てきた、
この庭の木なのではないかと・・・。

下から木を見上げた時に、
ほんとに、だけど、はっきりとそう思ったのです。
木が彼の姿を借りて、
私の所に降りてきたんだって・・・。

F i n